

高 柳 遺 跡

—府営高柳住宅建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書—

発
表

1991・3

寝屋川市教育委員会



綠釉陶器椀(京都洛北窯產) 90-2区上器群出土



綠釉陶器椀(京都洛西窯產) 同上出土



綠釉陶器椀(近江系) 同上出土



白磁梅 90-1区 P-16出土



灰釉陶器長頸瓶 90-2区土器群出土



綠釉陶器颈部 90-3区包含層出土



綠釉陶器(東海系)
90-2区包含層出土



綠釉陶器楕(京都洛北窯産) 90-2区井戸1出土



綠釉陶器楕(京都洛北窯産) 90-1区包含層出土



石製帯飾り 90-2区包含層出土

序

高柳遺跡は、今回の府営高柳住宅の建て替え工事に伴う発掘調査で発見された遺跡です。2年度にわたって行われた発掘調査によって、平安時代の集落跡が見つかりました。出土遺物には、白磁碗や縁釉・灰釉陶器といった高級な土器が多く見られ、この地にすんでいた人が、かなり有力な人物であることがわかりました。

今回の調査で得られた成果は、寝屋川市あるいは北河内地域の歴史の解明に役立つのみならず、畿内地域の平安時代の集落を考えるうえで極めて重要な資料を提供するものといえます。この報告書は、発掘調査の概要をまとめたものですが、本書が郷土の歴史と文化を明らかにする基礎資料となり、文化財に対する理解を深める一助となれば望外のよろこびです。

遺跡の所在する寝屋川市の西部は、埋蔵文化財が地中深く埋もれていたために、遺跡の有無についても不明な点が多かった地域ですが、最近の発掘調査によって、遺跡の存在が少しずつわかつてきました。こうした遺跡は、今回調査しました高柳遺跡のように遺跡の保存状況が極めて良好で、当時の人々の生活の復元に重要な資料を提供してくれます。寝屋川市教育委員会では、私達の祖先が残し、あるいは伝えてきた埋蔵文化財をはじめとする市内の文化財の保存をはかっていく所存ですので、今後とも本市の文化財保護行政に御理解・御協力賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査の実施にあたりまして御協力を賜わりました大阪府建築部住宅建設課・大阪府教育委員会文化財保護課をはじめ関係機関・関係各位には、厚くお礼申し上げますとともに、記録的な猛暑や厳しい寒さの中で発掘調査に携わった方々に深く感謝の意を表します。

平成3年3月

寝屋川市教育委員会
教育長 今道昭次

例　　言

1. 本書は、寝屋川市高柳2丁目390番地に所在する大阪府営高柳住宅の第1期建て替え工事にともなって実施した発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、大阪府建築部の委託により、平成元年度および平成2年度の2か年度にわたって寝屋川市教育委員会が実施した。
3. 調査にかかる費用は、全額を大阪府建築部が負担した。
4. 現地調査・遺物整理は、寝屋川市教育委員会文化振興課（旧社会教育課）文化財保護係濱田延充が担当した。現地調査については文化財保護係塩山則之の協力を得たほか、調査事務等については文化財保護係職員のほか文化振興課（旧社会教育課）振興係・企画係職員の協力を得た。
5. 現地調査の実施に当たっては、大阪府教育委員会文化財保護課・大阪府建築部住宅建設課・同營繕室・㈱大阪ガス京阪支社・寝屋川市水道局・寝屋川市教育委員会市史編纂室・地元自治会の協力を得た。
6. 現地調査・本書の作成にあたっては、次の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。
(順不同・敬称略)
石神 怡・瀬川 健・佐久間貴士・西口陽一（大阪府教育委員会） 栄原永達男（大阪市立大学） 橋本久和（高槻市立埋蔵文化財調査研究センター） 鐘柄俊夫（財団法人・大阪文化財センター） 前川 要（富山大学） 伊野近富・水谷寿克・石井清司・土橋 誠・森島康雄（財団法人・京都府埋蔵文化財調査研究センター） 森田 稔（神戸市立博物館） 野島 稔（四條畷市教育委員会） 石井久夫（大阪市立自然史博物館） 坂本孝彦（大阪府立香里ヶ丘高校） 梶山彦太郎
7. 発掘調査に参加したのは、下記の方々である。
麻野秀二 大西朝子 横原清美 川上奈奈美 木原美樹 小西恵子 佐藤育子 島アリサ
谷本由紀 古別府知子 渡辺暉紀 畠田寿美子 端野栄子 浅尾嘉雄 内田智子 勝田富美子 川瀬澄子 神門文江 木村香織 木村加代子 小島啓子 左近祐克枝 須崎美千代
竹下よし子 中西眞子 永吉幸子 西田容子
8. 本書の編集・執筆は、濱田延充が行った。
9. 土器実測図は縮尺をすべて1/4とし、断面黒塗りで須恵器を示し、それ以外は断面をしろ抜きとした。

目 次

序

例言

| | |
|----------------|----|
| 第1章 調査の経過 | 1 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 4 |
| 第3章 発掘調査の方法 | 7 |
| 第4章 発掘調査の成果 | 8 |
| 1. 基本層序 | 8 |
| 2. 検出された遺構 | 10 |
| (1) 平安時代中期の遺構 | 10 |
| (2) 平安時代後期の遺構 | 15 |
| 3. 出土した遺物 | 16 |
| (1) 出土土器 | 16 |
| (2) 石製帯飾り | 21 |
| (3) 馬具 | 21 |
| 第5章 まとめ | 32 |
| 1. 平安時代の上器 | 32 |
| 2. 平安時代の建物群の評価 | 34 |
| 3. まとめ | 35 |

挿 図 目 次

| | |
|--------------------------|----|
| 第1図 調査地位置図 | 1 |
| 第2図 調査区配置図 | 2 |
| 第3図 周辺遺跡位置図 | 5 |
| 第4図 土層模式図 | 8 |
| 第5図 遺構配置図 | 9 |
| 第6図 89-1・90-1区 平安時代遺構配置図 | 10 |
| 第7図 90-2区 平安時代遺構配置図 | 11 |
| 第8図 90-2区 井戸1実測図 | 12 |
| 第9図 90-2区 十器群出土状況実測図 | 13 |
| 第10図 90-2区 祭祀遺構検出状況実測図 | 14 |
| 第11図 90-3区 井戸2実測図 | 14 |

| | | |
|------|---------------------------|----|
| 第12図 | 90-3区 土坑1実測図 | 15 |
| 第13図 | 90-1・90-2区 遺構及び包含層出土上器実測図 | 23 |
| 第14図 | 90-2区 土器群出土土器実測図(1) | 24 |
| 第15図 | 90-2区 土器群出土土器実測図(2) | 25 |
| 第16図 | 90-2区 土器群出土土器実測図(3) | 26 |
| 第17図 | 90-2区 土器群出土土器実測図(4) | 27 |
| 第18図 | 90-2区 土器群出土土器実測図(5) | 28 |
| 第19図 | 90-2区 土器群出土土器実測図(6) | 29 |
| 第20図 | 90-2区 祭祀遺構・井戸1出土土器実測図 | 30 |
| 第21図 | 90-3区 出出土器・石製帶飾り実測図 | 31 |

図 版 日 次

- 図版1 a 89-1・90-1区 調査区全景(東から)
 b 89-1区 調査区全景(北から)
- 図版2 a 90-1区 調査区全景(北から)
 b 90-1区 北側柱穴群(東から)
- 図版3 a 90-1区 P-27(南から)
 b 90-1区 P-42(南から)
 c 90-1区 P-41(南東から)
 d 90-1区 P-48(南から)
- 図版4 a 90-1区 P-80(南から)
 b 90-1区 P-158(東から)
 c 90-1区 P-160(東から)
 d 90-1区 十坑3(南から)
- 図版5 a 90-2区 調査区全景(北から)
 b 90-2区 柱穴群(北から)
- 図版6 a 90-2区 建物1(北から)
 b 90-2区 建物2(東から)
- 図版7 a 90-2区 土器群(北東から)
 b 90-2区 土器群(東から)
 c 90-2区 土器群(南東から)
- 図版8 a 90-2区 土器群南側(南東から)
 b 90-2区 土器群北側(北西から)

- c 90-2区 土器群（中央は白色無釉陶器三足盤）
- d 90-2区 土器群（中央は須恵器鉢）
- 図版9 a 90-2区 井戸1（南から）
 - b 90-2区 井戸1（西から）
- 図版10 a 90-2区 祭祀遺構（南から）
 - b 90-2区 馬具（轡）出土状況（北から）
- 図版11 a 90-3区 調査区全景（南から）
 - b 90-3区 井戸2（西から）
- 図版12 a 90-4区 全景（南から）
 - b 90-4区 全景（北から）
- 図版13 90-1区 出土土器
- 図版14 90-2区 土器群出土土器（1）
- 図版15 90-2区 土器群（2）・包含層出土土器
- 図版16 90-2区 土器群出土土器（3）
- 図版17 90-2区 土器群出土土器（4）
- 図版18 90-2区 土器群出土土器（5）
- 図版19 90-2区 祭祀遺構出土土器
- 図版20 90-2区 井戸1出土土器・石製帶飾り
- 図版21 90-3区 出土土器

第1章 調査の経過

今回、発掘調査を行った寝屋川市高柳2丁目390番地には、1950年代に建築された木造平屋建ての府営住宅が建ち並んでいた。大阪府下では、木造の府営住宅が建築後すでに30年以上経過して老朽化が進み、また、公営住宅の安定供給が叫ばれる中で、高層建物への建て替え工事が進められている。



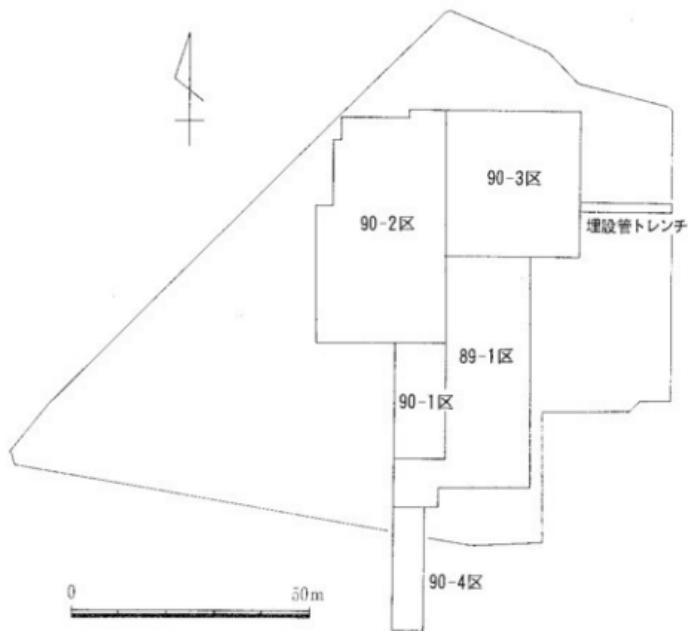
第1図 調査位置図 (S=1/2500)

寝屋川市域にも数箇所の府営住宅があり、このうちすでに建て替え事業が進められているところもあるが、この高柳住宅についても建て替え工事の決定がなされた。付近は、これまで遺構・遺物の出土も知られておらず、周知の遺跡として認められていなかった地域である。しかし、今回の工事計画では、開発面積が大きく、計画の建物は鉄筋の高層建築のため杭基礎が地中深く打ち込まれることから、大阪府教育委員会は第1期建て替え工事に先立って遺跡の有無を確認するため、平成元年4月に工事区域内の計8箇所の試掘坑を設定し、試掘調査を実施した。その結果、東側5ヶ所の現地表下約0.7~1.2mより遺物が出上し、さらに1

ヶ所の試掘坑では溝と考えられる遺構が壁断面で確認され、遺跡の存在が明らかとなった。

大阪府教育委員会では、大阪府建築部に遺跡の存在する工事区域東側について、工事によって遺構の破壊が想定される部分の発掘調査の実施を指示した。このため、発掘調査の実施について大阪府教育委員会文化財保護課・大阪府建築部住宅建設課・寝屋川市教育委員会社会教育課の三者で同年10月に協議がもたれた。その結果、発掘調査は寝屋川市教育委員会が行うこととし、調査にかかる費用は大阪府建築部が負担することとなった。発掘調査は、建て替え工事の工程から急を要するものであったが、寝屋川市教育委員会では平成元年度の事業をすでに実施しており、調査の開始については平成2年2月以降でしかできないため、調査対象地域（3107m²）のうち1019m²を平成元年度に、残りを平成2年度に実施することとなった。

平成元年度調査地（89-1区）は、平成元年2月24日より現地調査に入り、3月24日に調査を終了した。この調査によって、当初発掘調査の必要なしと判断された調査地の西側にも遺跡が広がることが判明した。一方、この地域には、3号棟の建設工事の準備が進められていた。そこで、上記三者の間で再び協議がもたれ、この3号棟の東側半分（256m²）の区域



第2図 調査区配置図

(90-1区)について、工事の着工を延期して発掘調査を実施することとなった。また、これとは別に住宅建設課より南側の埋設管引込部分(170m²)について発掘調査の依頼があり、これらを平成2年度の調査に追加することとなった。

90-1区の調査は、建築工事の工程より急を要するもので、平成2年4月から調査を開始した。平安時代の多数の柱穴と多量の土器を検出し、5月24日に現地調査を終了した。

当初予定された平成2年度の調査地(2088m²)は、掘削廃土の仮置場所等の問題から、調査地を東西に2分して西側(90-2区)から調査を実施した。90-2区は6月1日から調査に入り、8月31日に調査を終了した。この夏は、気象台の観測史上に残る記録的な猛暑で調査は困難を極めたが、90-1区同様に多数の柱穴や、大量の土器を廃棄した跡・地鎮祭を行ったと考えられる遺構が見つかった。このため調査成果を新聞に発表し、8月11日に市民を対象に現地説明会を実施した。説明会当日は、約200名の参加者を得た。

東側調査地(90-3区)は、10月11日から調査を開始し、集落の縁辺部や自然河川を検出し、11月30日に調査を終了した。調査の終了間際に季節外れの台風の影響を受け、ヘリコプターによる遺構の撮影が、2度にわたって延期された。

埋設管設置部分(90-4区)の調査は、12月1日より開始し、平安時代の柱穴・近世以降の溜池を検出して12月26日に調査を終了した。

発掘調査によって出土した遺物の整理作業については、現地調査と併行して進めた。遺物は平安時代の土器を中心に遺物収納容器約300箱におよぶ。このため、整理方法については、まず遺物の洗浄・注記を完了させ、土器については、とりあえず概要報告書作成のために良好な資料と思われるものを中心に復元・実測の作業を行った。遺物の整理作業は、3月28日に終了した。また、柱根をはじめとする木製品と刀子・櫛等の金属製品については、(財)元興寺文化財研究所に委託して保存処理作業を行った。

第2章 遺跡の位置と環境

高柳遺跡は、寝屋川市の西部に位置する。この地域は淀川左岸の下流域にあり、淀川の堆積作用によって形成された沖積平野に立地している。遺跡周辺の現地表面の標高は、約3mである。

淀川の分流である古川は、北河内の平野部を南流しているが、調査地の周辺では現在東から南に大きく蛇行して流れている。梶山彦太郎・市原実両氏による大阪平野の古地形の復元^(注1)によると、遺跡は淀川及びその分流の形成した三角州・自然堤防上に立地している。

淀川左岸の低湿地では、遺跡の分布の希薄な地域として永らく理解されてきた。しかし近年の大規模な開発に伴う発掘調査によって遺跡の発見が相次いでいる。

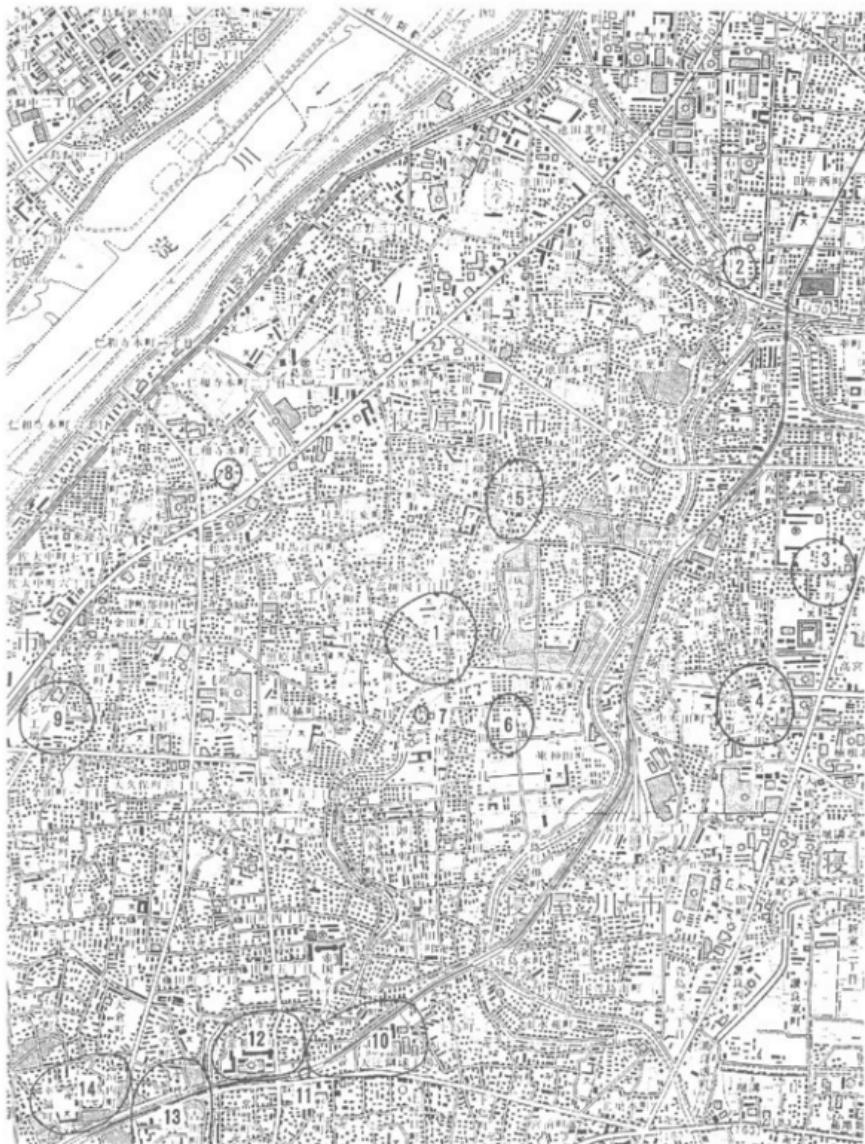
縄文時代には、守口市八雲遺跡^(注2)で晩期の土器が採集されているにすぎず、人間の生活の痕跡は明らかになっていない。弥生時代になると、大阪市森小路^(注3)（前期～中期）・守口市八雲^(注4)（中期）のように発掘調査によって集落の存在が明らかになっている遺跡をはじめ、守口市長池町（中期）・橋波西之町（前期）・門真市普賢寺^(注5)（前期）等の遺跡で土器の出土が知られている。また、門真市の京阪大和田駅構内では、複数個の銅鐸が見つかっている。

古墳時代にはいると、八雲遺跡で前期の土器がまとまって出土しているほか、守口市梶遺跡^(注6)で前方後円墳を含む古墳、同市大庭北遺跡^(注7)で方墳が発掘調査によって検出されている。

淀川左岸下流域は律令期以降、河内国茨田郡に属することが知られているが、古事記・日本書紀では、仁徳期にこの地に茨田堤を築き屯倉を設置したと伝えられている。門真市宮野口遺跡^(注8)で古墳時代中期後半の土器が出土しているほか、茨田郡条里遺跡内の本市石津南町・池田本町でも同時期の遺物が採集されており、同時期の集落の存在を予見させる。このほか、讚良郡になるが、寝屋川市長保寺遺跡^(注9)では古墳時代中期から後期の集落が見つかり、井戸枠に再利用された古代船の船体の一部が発見されている。

律令期以降、奈良時代を通じて茨田郡域では遺跡の分布は希薄になる。本遺跡の北側に位置する本市长栄寺町では古瓦が採集され、付近に寺院跡（高柳庵寺跡）の存在が推定されている。この寺院を、聖徳太子四十六か寺のひとつの中田寺あるいは茨田郡の郡寺に比定する考え方がある^(注10)。

平安時代の中頃（9世紀後半）から鎌倉時代にかけて遺跡数は増加する。守口市大庭北遺跡^(注11)では、平安時代～鎌倉時代の集落が見つかっており、掃部寮領大庭庄に比定されている。高柳遺跡の東南に位置する神田東後遺跡^(注12)では、平安時代（9世紀後半～10世紀）の集落跡が見つかり、綠釉・灰釉陶器を含む多量の土器が出土している。このほか瓦器碗が出土した門真市古川遺跡等が知られている。



1. 高柳遺跡 2. 楠遺跡 3. 高宮八丁遺跡 4. 長保寺遺跡 5. 高柳庵寺跡 6. 神田東後遺跡
7. 神田天満宮のくすのき(府天然記念物) 8. 観音寺跡 9. 大庭北遺跡 10. 宮野野口遺跡 11. 大和田遺跡
12. 常称寺遺跡 13. 古川遺跡 14. 普賢寺遺跡

第3図 周辺遺跡位置図 (S=1/25,000)

本遺跡の所在する寝屋川市高柳は、鎌倉時代初頭には成立していたと考えられる高柳庄の所在地と考えられている。同庄は、工家領あるいは摂関家領として相伝されていたことが知られている^(註13)。

こうした地理的・歴史的環境にある本遺跡は、戦後しばらくまで水田あるいは梨畠の広がる田園地帯であったが、昭和30年代以降大阪近郊の都市化とともに宅地化が進み、木造の住宅が立ち並ぶ現在の景観となった。しかし、大規模な開発もなく遺物等の出土もなかつたため、今回の調査に至るまで遺跡の存在は知られていなかった。

注

1. 梶山彦太郎・市原実 「大阪平野のおいたち」 青木書店 1985
2. 守口市教育委員会 『八雲遺跡』 1976
3. 福永信雄 「大阪市森小路遺跡で採集された遺物」 『東大阪市遺跡保護調査会年報』 1979年度 1980
- 文珠省三 「森小路遺跡出土遺物—伊東正一氏寄贈資料の紹介—」 『大阪市立博物館研究紀要』 第13冊 1981
- 西畠佳恵 「森小路遺跡出土の近江型鏡」 『葦火』 29号 （財）大阪市文化財協会 1990
- このほか近年の遺跡の調査略報は、各年度の『大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告書』に収録されている。
4. 大阪府教育委員会 『八雲遺跡発掘調査概要・I』 1987
5. 門真市教育委員会 『普賢寺遺跡発掘調査概要・I』 1990
6. 守口市教育委員会 『堀遺跡現地説明会資料』 1989
7. 大庭北遺跡発掘調査団 『大庭北遺跡』 1986
8. 大阪府教育委員会 『宮野遺跡発掘調査概要』 1986
9. 大阪府教育委員会 『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・I』 1989
- 大阪府教育委員会 『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・II』 1991
10. 藤沢一夫 「寝屋川市域の古代寺院」 『寝屋川市誌』 1966
11. 大阪府教育委員会 『大庭北遺跡発掘調査概要・I』 1984
- 大阪府教育委員会 『大庭北遺跡発掘調査概要・II』 1986
12. 寝屋川市教育委員会 『神田東後遺跡』 1989
13. 「九条家文書」 竹内理三編 『鎌倉遺文』 7250

第3章 発掘調査の方法

調査は、中・高層住宅、集会所、雨水貯水池、埋設管等の工事によって遺構の破壊される部分を対象とし、記録保存を目的に行った。調査は、大阪府教育委員会の試掘調査の成果をもとに現地表下0.5~0.7mまでの盛土及び旧耕土層を機械によって除去し、それ以下1.2mまでの厚さ約0.5mの遺物包含層を人力掘削し、遺構・遺物の検出につとめた。遺構の検出については、特に平安時代の集落が検出された基本層序N層上面の1枚を中心に調査を進めた。

遺構の平面測量については、ヘリコプターによる航空撮影した写真から縮尺1/20及び1/100の図化を行った。この他の調査区周壁の土層断面図・遺物の出土状況図・遺構内の堆積土層断面図については、人力によって実測を行った。また、遺構の主要な部分については6×7の中型カメラで、その他を35mm小型カメラで写真の撮影を行った。小型カメラでは、白黒ネガフィルムとともにカラーポジフィルムで撮影を行い、スライドを作製した。

また、89-1区において各堆積土層の土壤サンプルを採取して、花粉等の微化石の分析を行った。

第4章 発掘調査の成果

1. 基本層序

調査地は、自然河川とその周辺（自然堤防・後背湿地）に位置し、非常に複雑な堆積状況を示している。このため、調査地によって堆積土層の状況は若干異なるが、その概略は次のとおりである。

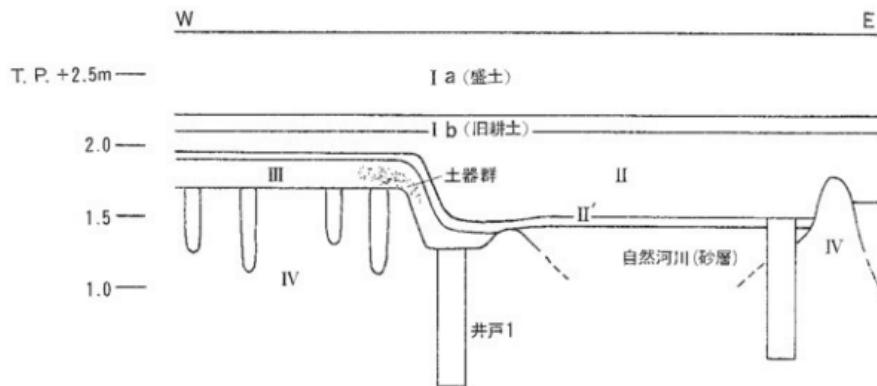
I層 機械掘削を行った土層である。

Ia層 1950年代に府営住宅建設を行った際の盛土である。上面から木造住宅建築の際の基礎杭が打ち込まれている。

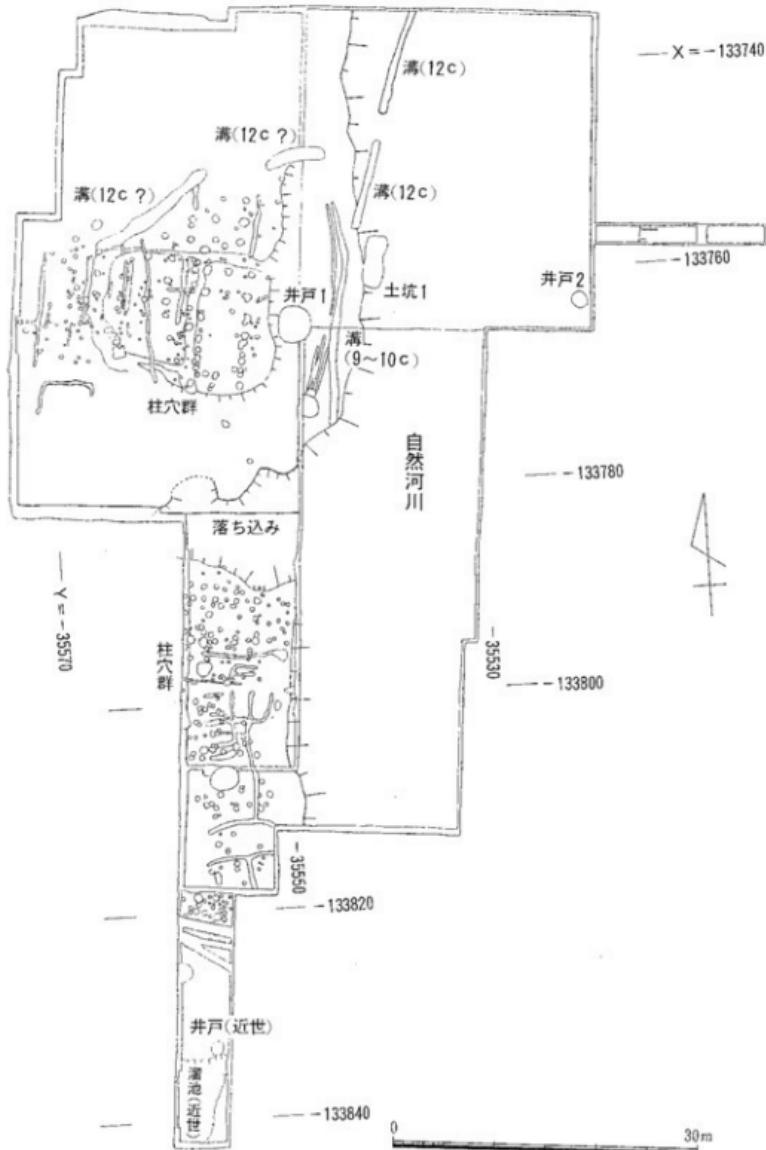
Ib層 黒灰色～暗灰色粘質土層。府営住宅建設まで耕作が行われていた畑・水田の耕土である。調査地付近は、かつて梨畠が広がっていたと地元の方が話されていた。

II層 平安時代の集落が廃絶した後の堆積層である。平安時代～江戸時代の遺物が出土している。断面の観察により、さらに2～3層に分層が可能である。堆積土は、橙灰色砂質土・茶灰色砂質土・黄灰色砂質土・緑灰色砂質土である。水田・畑に利用されていたと考えられる。

II'層 平安時代の遺構面・遺物包含層さらに自然河川に堆積する砂層の上を薄く覆っている灰色粘土層である。90-2区溝1・2、90-3区井戸2・土坑1等の遺構が上面より掘削されている。



第4図 上層模式図



第5図 遺構配置図

- Ⅲ層 平安時代中頃（9世紀後半～10世紀）の遺物包含層である。柱穴等の遺構が検出された集落部分に厚く認められ、この部分をはずれると薄くなり検出されないところもある。自然河川上でも検出されていない。堆積土は黒色粘質土で、部分的に炭・灰・焼土が多く含まれている。90-3区西南部でさらに3層に分層ができた。下位よりⅢa・Ⅲb・Ⅲc層と呼称するが、このうちⅢb層に特に炭・焼土が多く含まれる。遺物の出土量もこのⅢb層が最も多く、90-2区土器群と接合した土器片も出土している。井戸1はこのⅢb層から掘り込まれている。柱穴にはこのⅢ層から掘り込まれているものがいくつかある。
- IV層 灰緑色粘土層ほか。これより下部はおおむね無遺物層である。上面は平安時代中頃の遺構面で、柱穴・溝などの多数の遺構が検出された。遺構が検出された部分では、上部が酸化して橙灰色を呈している。

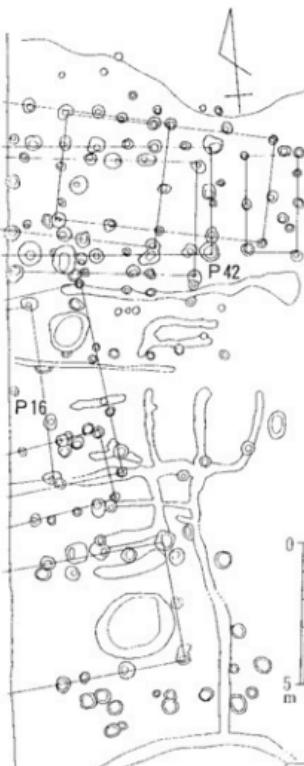
2. 検出された遺構

(1) 平安時代中期の遺構

自然河川

90-3区から89-1区にかけて検出された広く南北方向に広がる砂の堆積である。調査区内で幅30mをはかる。部分的にトレチを入れたところ、深さ1m程度で川底と推測される粘土層が検出された。90-3区の埋設管トレチでは、土手状の高まりが検出され、この東側ではさらに深くなることから、各調査区に広がる浅い部分は河川敷（川原）、東側が河川の本流部分と推定される。川原部分に堆積した砂層は洪水によるものでその吹き出す部分が90-3区で認められた（図版11a）。

この自然河川については、検出位置・流れの方向から現在調査地の東側を大きく南に蛇行している吉川の一時期の流路であった可能性が高い。砂層からの遺物の出土がほとんど無かったので時期の比定が難しいが、砂層の上位の灰色粘土層（Ⅱ'層）から90-3区井



第6図 89-1・90-1区平安時代遺構配置図
(S=1/200)

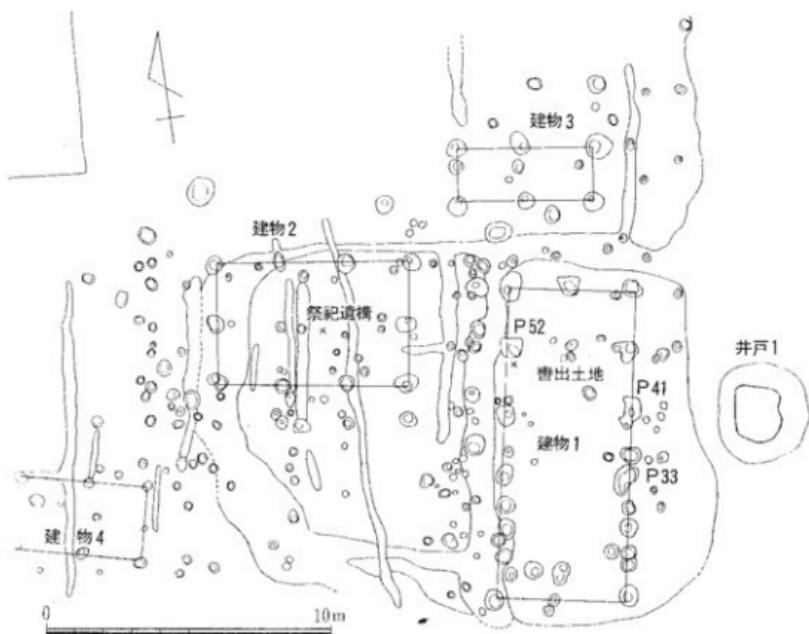
戸2・土坑1が掘削されていることから、11世紀には埋没したものと推測される。

柱穴群（第6・7図）

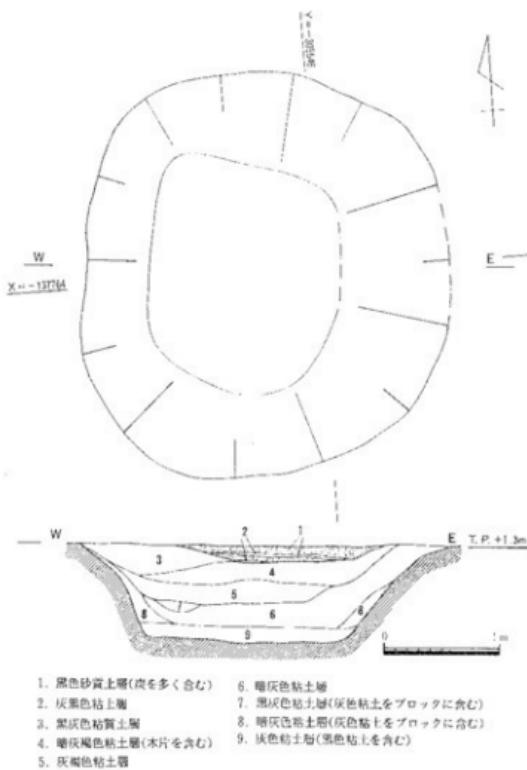
自然河川の西側の89-1区・90-1区・90-2区・90-4区で検出された多数の柱穴である。検出面はⅣ層上面であるが、Ⅲ層下部あるいはⅢ層上面から掘り込まれたものもあると考えられる。自然堤防と考えられる微高地上に密集して検出されており、90-1区と90-2区の間の落ち込み部分で大きく南北に二分される。

柱穴は、直径30cm・深さ30cm程度のものから直径80cm・深さ1mのものまである。埋土の観察から、大部分の柱穴は建物等の廃絶後に柱を抜き取ったと考えられる。大型の柱穴の多くは、柱の抜き取り跡の埋土に炭・焼土を多く含んでいた。柱穴内に柱根の遺存するものは、89-1区で1ヶ所、90-1区で3ヶ所、90-2区で12ヶ所あった。柱根は現存径10~30cmである。この中で90-1区P-10で検出された遺存状態の良好な柱根は上部が半分に裂けたようく欠損しており、柱を抜き取る際に失敗して柱根部が放置されて遺存したと考えられる。柱穴内の出土遺物より、いずれも9~10世紀のものと考えられる。

掘立柱建物



第7図 90-2区平安時代遺構配置図 (S=1/200)



第8図 90-2区井戸1実測図 ($S=1/50$)

西側の建物2は2間×3間で南と西に1間の廊をもつ。柱穴内出土土器には黒色土器B類・「て」の字状口縁皿が見られ、建物1及び土器群よりも新しい様相を呈している。

北側の建物3は1間×2間で、倉庫・納屋の機能をもつものであろう。

井戸1（第8図）

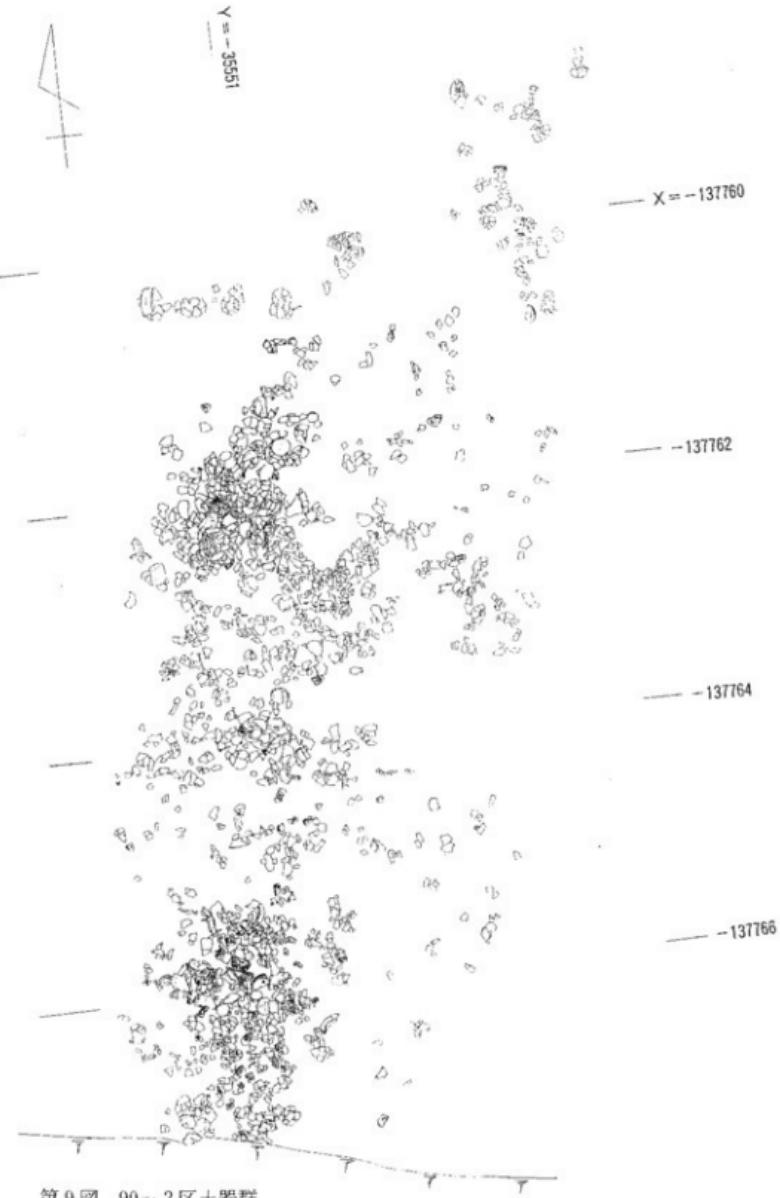
89-1区・90-2区・90-3区に分割して調査が行われた。90-2区の柱穴群及び土器群の検出された東側の斜面の下で検出された。直径3.5m、深さ0.9mをはかる平面円形の素掘りの井戸である。井戸枠等の施設は認められなかった。遺構は、土器群の延長と考えられるIIIb層から掘り込まれている。

埋土は大きく3層に分層される。1層（第8図1・2）・2層（3～7）は井戸廃棄後の埋め戻しの際に、また3層（8・9）は井戸機能時に堆積したと推定される。1層は炭層で、

89-1区～90-1区南側の柱穴群で復原される建物はN-5°～10°-Wに主軸をもつものである。調査区内におさまる建物は無い。

90-1区北側の柱穴群は5～6棟の建物が重なっている。東側の1間×2間の建物を除くとおおむね2間×4間程度の規模に復原される。E軸はN-5°-Eをもつものと、N-10°-Eのものに分かれる。

90-2区で復原された建物は4棟で、主軸はN-7°～12°-Eである。東側の建物1は2間×5間で南北に長い建物である。東側の柱列のP-41・P-33は後述する土器群を取り上げ後に検出されており、柱の抜き取り跡の埋土から出土した土器は土器群との接合関係を有する。柱穴からの出土土器は、9世紀末～10世紀初頭の時期が与えられる。



第9図 90-2区土器群
出土状況実測図

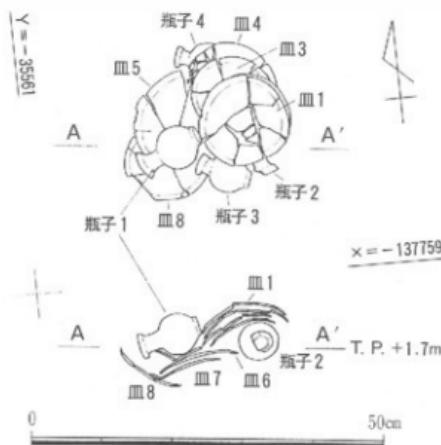
完形あるいは完形に近い黒色土器碗・土師器皿が出土している。これらは、井戸を埋め戻す際のなんらかの祭祀行為に関係するものと考えられる。これらの土器から遺構が廃棄された時期を10世紀後半とすることができる。一方、2・3層出土土器には土器群や包含層出土土器と接合したものがある。接合した土器は、遺構の機能時や廃棄時の埋め戻しの際に周辺より混入したものと理解される。

土器群（第9図）

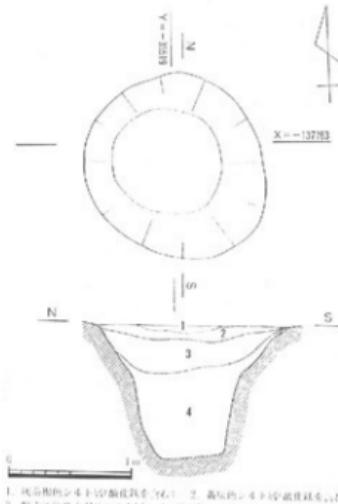
90-2区の建物1の東側は自然河川に向かって緩やかに傾斜している。この斜面上で検出された南北8m、東西4mに広がる土器集積である。部分的に建物1の柱穴を覆っている。

出土土器には土師器杯・皿・耳皿・甕・羽釜、黒色土器杯・碗・耳皿・甕、綠釉陶器碗・皿、灰釉陶器壺・手付小瓶・皿、白色無釉陶器三足盤・碗、須恵器杯・碗・鉢・壺・瓶等がある。このうち土師器と黒色土器の杯は完形で出土したものが多く、それぞれ70個体以上が完形に復元できる。数個体が重なった状況で出土したものもある。土器のほかには鉄製刀子2本、焼けた痕のある自然石が出土しており、炭・焼土も多く認められた。

出土状況から土器群には大きく南北2ヶ所にまとまりが認められるが、両者の間で接合関係を有する土器がある。また、北側の部分では、出土レベルが上下で接合したものもある。さら



第10図 祭祀遺構検出状況実測図 (S=1/10)



第11図 90-3区井戸2実測図 (S=1/50)

に、土器群除去後に検出された建物1の柱穴内出土土器に、土器群出土のものと接合したものがある。以上の事実から、土器群の形成については、建物1の廃絶（焼失？）後に、そのあとかたづけとして短期間に大量の土器の廃棄が行われたと考えられる。

完形の白色無釉陶器三足盤は最上層で出土しており（図版8c）、廃棄行為の最終段階で何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。

出土土器のうち完形品になるのは日常雑器である土師器・黒色土器の杯・皿類ばかりで、高級品の縁釉・灰釉陶器はいずれも破損品であり、土器の廃棄行為の内容を示すものである。

祭祀遺構（第10図）

90-2区中央のⅢ層掘削中に須恵器瓶子4個体

・土師器皿8枚がかたまって検出された。出土土器はいずれも完形品である。周辺を精査したが遺構にともなう明確な掘り込みは検出できなかった。

出土状況から土器の原位置を復原すると、中心に土師器皿8枚を重ねてその東西南北に須恵器瓶子をそれぞれ1個体ずつ置いたと推定される。土師器皿は、一番下の1枚を上向けに、他の7枚は伏せて置かれていた^(注1)と指定される。

また、東に置かれていた瓶子2（第20図）の中に古銭が1枚入っていた。この古銭は瓶子の口が小さいため半分に折られて入れられていた。古銭は銹化が進んでおり文字の判読ができなかった。直径が1.91cm・重さ2.1gで小型のため、皇朝十二銭でも「長年大宝」（848年初鋤）以降の新しい時期のものであろう。

祭祀遺構は検出位置が建物2の内部にあり、建物2の建築時の地鎮祭にともなうものと考えられる。

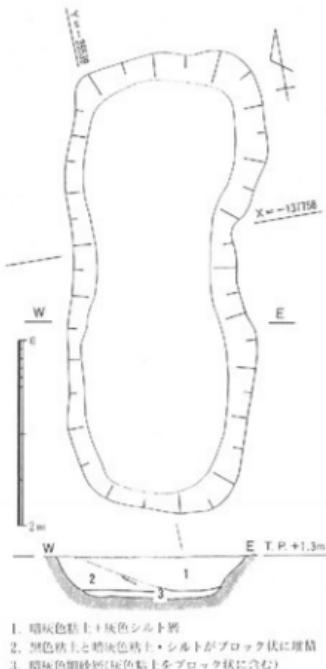
（2）平安時代後期の遺構

井戸2（第11図）

90-3区南東で検出された直径1.5m・深さ1.1mの平面円形の素掘りの井戸である。遺構は自然河川埋没後、Ⅱ'層より掘り込まれていた。埋土は大きく4層に分層される。出土遺物は少ないが、3層より瓦器椀が出土しており、この瓦器椀より井戸の廃絶時期は12世紀前葉と推定される。

土坑1（第12図）

90-3区西側で検出された長さ5m・幅2m・深さ0.5mの平面長方形の掘り込みである。



第12図 90-3区土坑1実測図 (S=1/50)

1. 緞灰色粘土+灰色シルト層
2. 黒色粘土と暗灰色粘土・シルトがブロック状に埋積
3. 緞灰色細砂層(灰色粘土をブロック状に含む)

自然河川埋没後に掘り込まれている。埋土は、粘土とシルトがブロック状に堆積していた。埋土内から瓦器碗、土師器皿・甕が出土しており、遺構の時期は12世紀前葉と考えられる。

3. 出土した遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器・石製品・金属製品・木製品と多様である。特に出土土器は、平安時代のものを中心にして、遺物収納箱（コンテナ）約300箱にのぼる。出土土器には若干の古墳時代の須恵器や近世以降の陶磁器も認められるが、本書ではこのうち特に重要と思われる平安時代（9～12世紀）の資料を中心に各調査区ごとに紹介を行う。

（1）出土土器

1) 90-1区P-42出土土器（第13図1～9）

掘立柱建物の柱穴の柱抜き取り跡の埋土内から出土した土器である。

黒色土器（1・2）はいずれも内面黒化処理のA類で高台の付く杯Bである。（1）は器高指數26。高台は低く、断面三角形を呈する。

土師器杯（3～8）は、口径14～15cmの無高台のもの。底部が大きく浅いもので体部外面にユビオサエ痕の残るもの（6～8）と、底部が小さく深いもので外面をナデ調整するもの（3～5）がある。

須恵器（9）は瓶子の底部である。底部外面は糸切り未調整。

2) 90-1区Ⅲ層ほか出土土器（第13図10～18）

平安時代中期遺構面を覆っている遺物包含層（Ⅲ層）出土の土器である。

黒色土器杯（10）は、低い高台をもつA類の杯B。内面には暗文が認められる。

土師器は皿（11）、杯（12）がある。

白磁碗（14）は器壁が全体に薄く、口縁部が小さな玉縁状を呈する。森田分類^(注2)のI類に属するいわゆる刑窯・定窯系の白磁である。釉調は乳白色を呈し、全面施釉の後、底部のたたみ付けの部分を研磨している。P-16出土の破片とⅢ層出土の破片が接合した。

緑釉陶器には、軟質で削り出しの輪高台をもつ碗（17）と、硬質で削り出しの蛇の目高台をもつ皿（15）がある。（17）は淡緑色の釉薬を全面施釉しており、京都洛北窯産のものと推定される。（15）は胎土中に砂粒を含み暗緑色の釉薬を全面施釉する。京都洛西窯産のものであろう。（13）は緑釉素地と考えられる小碗である。底部は糸切り未調整。

灰釉陶器には、皿（16）と壺底部（18）がある。皿（16）は断面三日月形の貼り付け高台で、刷毛がけの施釉を行う。内面見込み部分にも一筆の刷毛がけを行っている。胎土・釉調より東濃窯産と考えられるもので、光ヶ丘1号窯式（猿投窯・黒窓90号窯式併行）^(注3)に比定できよう。

3) 90-2区土器群出土土器（第14～19図）

今回の調査で検出された遺構の中で、土器の出土量の最も多かった遺構である。黒色土器および土師器の杯は、完形品のみでそれぞれ70個体以上となる。この他、縁釉・灰釉陶器、須恵器など器種も豊富である。

縁釉陶器碗には、椀（30～34）と皿（35）がある。（30）は軟質で蛇の目高台をもち、淡緑色の釉調を呈する京都洛北窯産の碗である。（31～33）は、硬質で削り出し高台をもつ京都洛西窯あるいは篠窯産の碗である。（33）は井戸1の3層及び包含層（皿層）出土の破片と接合関係を有する。（34）は、貼り付け高台をもち濃緑色の釉調を呈する近江系の碗である。底部内面には1条の沈線が巡り、焼成時のトチン痕が認められる。胎土は硬質で底部外面まで全面施釉されている。

（35）は体部に棱をもつ皿である。底部は削り出しの輪高台。淡黄緑色の釉調を呈する。底部外面には施釉されておらず、京都篠窯産のものであろう。

（36）は縁釉陶器素地の碗である。内外面はヘラミガキが施されており、削り出しの輪高台をもつ。全体のプロポーションは縁釉陶器碗（31）に類似する。京都洛西窯産のものであろう。

灰釉陶器には、皿（37）、手付小瓶（38）、長頸瓶（39）がある。皿（37）は三日月形の貼り付け高台をもち、刷毛がけで施釉が行われている。胎土・釉調より尾北窯産のものと考えられる。篠岡4号窯式（猿投窯・黒塙90号窯式併行）に比定されよう。手付小瓶（38）、長頸瓶（39）は猿投窯産、黒塙90号窯式のものである^(注4)。

（40・41）は、白色土器あるいは白色無釉陶器と呼ばれるもの。（40）は三足盤（皿）である。平安京跡左兵衛府S D-01^(注5)、一乗寺向畠町遺跡S K-03^(注6)に類例がある。（41）は円盤高台をもつ碗である。内外面ともロクロナデ調整で、底部は糸切り未調整。

須恵器には、椀（42）、杯（43・49）、瓶子（44）、壺（45・46）、鉢（47・48）がある。このうち（42～48）は、形態・胎土等の特徴より京都篠窯産と考えられる。伊野近富氏のに編年^(注7)に従うと、（44）はF期（石原畑2号窯）、（42・45～47）はG期（西長尾3号窯）、（48）は玉縁状の口縁をもつ鉢でH期（前山2・3号窯）に比定されよう。（45・47）はやや軟質で灰色～灰白色を呈する。他のものは、青灰色を呈する硬質のものである。

黒色土器には、杯もしくは椀（50～72）、耳皿（73～75）、鉢（76・77）、椀（78～80）、甕（136）がある。無高台の杯（杯A）は含まれていないようである。このうち、椀（71・72）は内外面を黒化処理するB類で、その他はすべて内面の黒化処理するA類である。

A類（50～70）杯は、いずれも有高台の杯Bである。口径17cmを越える大型品（56・69）、口径15cm程度の中型品（50～55・59～68）、口径13cm程度の小型品（57・58・70）がある。

体部は直線的にのびるものと、丸みをもつものの二者がある。高台は、低く断面三角形を呈する。器高指数は26～30。外面の調整はヘラケズリを施すものと、ナデ調整のものがある。内面はヘラミガキ調整であるが、暗文を施すもの（50～59・62・65）がある。また、焼成後

のヘラ記号を施すもの（54・55）がある。

黒色土器B類椀（71・72）は、内外面とも密なヘラミガキを施すものである。（72）は、小型品で底部外面にもヘラミガキを施す。

鉢（76）は、片口をもつ無高台のもの。（77）は有高台のもので、体部外面はヘラケズリを施す。

椀（78～80）には、無高台の小型品（78）と有高台のもの（79・80）がある。

甕（136）は薄手の作りの小型品。

土師器（81～135・137～142）には、皿（81～99）、耳皿（100）、杯（101～124）、羽釜（125～130）、甕（131～135・137～140）、鍋（141・142）がある。

皿は、口縁部を強くヨコナデし、端部をつまみ上げるもの（81～89・95・96）、口縁端部をつまみ上げないもの（90～94・97）、口縁端部を丸く仕上げ、内側に肥厚するもの（98・99）がある。小皿（81）と大皿（95）を除くと口縁部をヨコナデするものは、口径13～15cm、器高2.0cmにおさまる。（96）は、有高台のもの。灰白色を呈するもので、搬入品と考えられる。

耳皿（100）は、黒色土器と同形態のものである。

（101～103）は有高台の杯（杯B）である。

無高台の杯（杯A、104～124）は形態的にバラエティーがあるが、外面の調整は口縁部をナデ調整し下位にユビオサエを残すもの（e手法）あるいは全体をナデ調整するものばかりで、ヘラケズリを施すものは認められない。口縁部はヨコナデにより外反気味になるものが多い。内面の調整は、ナデのはか細かいハケメを施すものがある。大部分のものの法量は口径13～15cm、器高3～4cmにおさまる。内面に焼成後のヘラ記号を施すもの（105・121）が存在する。

羽釜（125～130）は、器壁が厚く口縁直下に鈎を付ける菅原分類^(注8)の摂津C型（125～128）が多い。鈎の付く位置・形態はバラエティーが認められる。体部外面の調整は荒いタテハケ。胎土に砂粒を多く含む。（129）は外反する口縁部をもつ河内B1型のもの。赤灰色の色調を呈する。（130）は両者の折衷型と考えられるもの。胎土中に角閃石・雲母を多く含み暗灰褐色の色調を呈する。

甕は器壁の薄いもの（131～135）と、摂津C型羽釜同様に厚いもの（137～140）がある。前者は、中・南河内地域に分布するもの。口縁端部を丸く仕上げるもの（131）、外反し端部に面をもつもの（132）、直立する短い頸部をもつもの（133～135）がある。体部外面は、ナデ調整等により指頭圧痕をきれいに消すもの（132・134・135）と指頭圧痕の残るもの（131・133）がある。器壁の厚いもの（137～140）は受口状の口縁をもつもので体部外面には摂津C型同様に荒いタテハケを施す。平安京・淀川流域出土が認められるもので、胎土も摂津C型羽釜と同じで砂粒を多く含む。（138）は強い熱を受けたためか、口縁部が片口状に変形している。

鍋（140・142）は、口径30cmを越える大型品。内外面ともナデ調整。外面には体部上位まで煤が付着している。胎土は砂粒をほとんど含まない精良なものである。

4) 祭祀遺構（第20図143～154）

須恵器瓶子4個体と皿8枚が出土している。

須恵器瓶子（151～154）は、器高10cmの（151・152）と8cmの（152・154）に分かれる。いずれも器形に若干の歪みがあり、焼成もやや軟質である。形態・胎土の特徴より京都縄窯産と考えられる。縄H期（前山2・3号窯）のものであろう。

土師器皿（143～150）は、口径11.8～13cm、器高1.6～2.0cmにおさまる。口縁部は横ナデにより段をもち、端部を上方に小さく突出させる。

5) 井戸1（第20図155～172）

井戸1出土土器には、黒色土器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器がある。出土土器には包含層出土土器と接合したものがあり、このほかにも包含層の再堆積による混入品と考えられるものがある。

土師器皿（155～159）には、口径11cm程度の小型品（155～157）と口径13～14cmの中型品（158・159）がある。（155・156）は1層から出土した完形品。口径11.5cm、器高1.5cm。口縁部は強く横ナデされており、端部を上方につまみ上げるいわゆる「て」の字状口縁皿である。ともに乳白色の精良な胎土である。（157）は稚拙な作りもの。胎土も褐色を呈するもので前者と異なる。（158・159）は2層出土。

黒色土器碗（160～166）は、いずれもA類である。（162・165）が1層上面、（160・164）が1層、その他は2層から出土している。全体的に深碗状の形態をとる。口縁部を強くヨコナデし、体部に弱い稜線をもつものがある。高台も（160）をはじめ、高くなり、外側に踏ん張るような形態となる。外面の調整はナデまたはケズリが多いが、ヘラミガキを施すもの（161）もある。内面のヘラミガキは、若干荒いものもある。（164）のヘラミガキは、うろこ状に見える部分がある。（166）は内面のヘラミガキは太く荒いが、形態等から古く位置付けられるもので、混入品の可能性がある。

土師器杯（167）は無高台のもの。これも混入品と考えられるものである。2層出土。

緑釉陶器（168～171）は、皿（168）が3層、碗（169・170）が2層、（171）が1層上面出土。（168）は包含層出土の破片と接合した。混入品であろう。（169）が削り出しの蛇の目高台、その他は削り出しの輪高台をもつものである。いずれも焼成は硬質。底部外面は（169）が施釉、その他は無釉である。

灰釉陶器長頸瓶（172）は、胎土・釉調から猿投窯産と考えられる。2層出土。

6) 90-2区柱穴・包含層（第13図19～29）

緑釉陶器碗（19）は、P-52出土である。体部中位に弱い稜をもつもので、削り出しの輪高台を有する。焼成は硬質。底部外面以外に淡緑色の釉薬が施される。京都洛西窯あるいは

縁窯産のものであろう。

(20~29) は柱穴群をおおう遺物包含層であるⅢ層出土。

白磁碗 (20) は、玉縁の口縁に丸みを帯びた体部をもつ。森田分類のⅣ類に属するものであろう。

縁釉陶器 (21~24) は、蛇の目高台をもつ皿 (21) と貼り付け高台をもつもの (22~24) がある。(22・23) は接地面に段をもつ高台で、近江系のものであろう。釉調は濃緑色を呈し、底部外面は無釉。いずれも軟質の胎土を有する。(24) は内面見込み部分に陰刻花文を施すもので、東海系と考えられる。このほか、陰刻花文が施された口縁部片 (巻頭図版) が出土している。

(25) は三足の付く土師器皿である。(26) は、断面六角形に面取りされた土師器高杯の脚部である。

灰釉陶器 (27~29) は、長頸瓶である。(27) は口縁部。胎土中に黒色粒が多く認められる。猿投窯産のものであろう。(28・29) は体部である。(28) は淡灰色の釉調を呈するもの。尾北窯産のものであろうか。(29) は精良な胎土で、明灰色の色調を呈するもの。東濃産のものと考えられる。

7) 90-3区土坑1 (第21図173~182)

土師器皿 (173~178) 口径9.4~10.0cm、器高2.0cm。口縁部を強くヨコナデする、いわゆる「て」の字状口縁皿である。

瓦器碗 (179・180) は、いずれも口縁部がヨコナデにより外反し内側に沈線が巡るもので、大和型と考えられるが、(179) の内面見込み部分の暗文は楠葉型に見られるものである。外面は分割のヘラミガキを施す。川越俊一氏の大和型Ⅱ段階a型式^(注9)橋本久和氏の楠葉型Ⅱ-1~2期^(注10)に比定される。

土師器甕 (181) は厚手のもので、胎土中に砂粒を多く含む。

(182) は陶器壺の底部。赤茶褐色~灰色の色調を呈する。東海系のものであろう。

8) 井戸2 (第21図183)

瓦器碗 (183) は3層出土。比較的ていねいな作りで、外面に荒いヘラミガキが施される。内面見込み部分に輪状連結暗文が施されるもので大和型と推測される。川越氏のⅡ段階a型式のものと考えられる。

9) 90-3区包含層 (第183図184~186)

(184) は、灰釉陶器耳皿。底部は糸切り未調整。

(185) は、縁釉陶器の歓足。焼成はやや軟質で灰白色の胎土に全面施釉されているが、釉薬は大部分が黒銀色に変色している。

(186) は、縁釉陶器水注の口の部分。断面八角形に面取りする。釉調は淡緑色。越州窯青磁・長砂銅官窯陶磁器等の輸入陶磁器の写しであろう。

10) 墨書き土器 (図版15 188・189)

墨書き土器は4点出土している。内2点が判読可能である。(188)は黒色土器A類杯Bの底面に書かれたもので、「□宅」と読める。(189)は土師器に書かれたもので「宅」と判読できる。「○○宅」と書かれた墨書き土器には、四條畷市岡山南遺跡第6次調査井戸1から出土した黒色土器碗底面に「高田宅」・「福万宅」と書かれたものがある^(注11)。いずれも90-2区Ⅲ層出土。

(2) 石製帶飾り (図版186)

90-2区東側のⅢ層上面から出土した。縦3.7cm、横4.0cm、厚さ0.6cmの方形板を呈する「巡方」に分類されるものである。下位に0.4cm×3.0cmの長方形の透孔が穿たれる。帯に接着する面(裏面)を除いて各面はていねいに研磨されている。裏面には四隅に帯に縫い付けるための潜孔が開けられている。龜田博氏の分類^(注12)のE類に属する。石材は蛇紋岩である^(注13)。大阪府下では石製帶飾り(石鎧)は「丸柄」をあわせて20例あまりの出土が報告されている^(注14)。

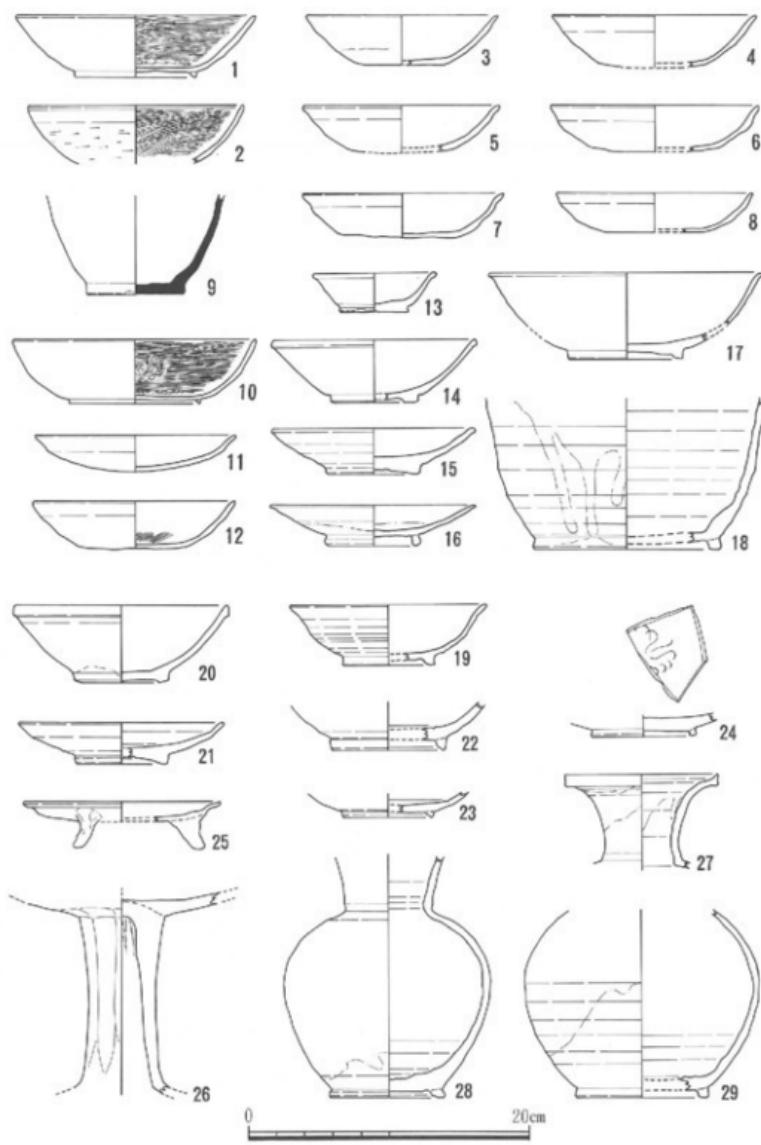
(3) 馬具 (図版10b)

90-2区のⅣ層上面で検出された「轡」の部分である。「衡」と素環の「鏡板」が連結した状態で出土している。鏡板の直径9.0cm。出土位置は、建物1の内部である。伴出した土師器杯より90-2区土器群と同時期のものと考えられる。

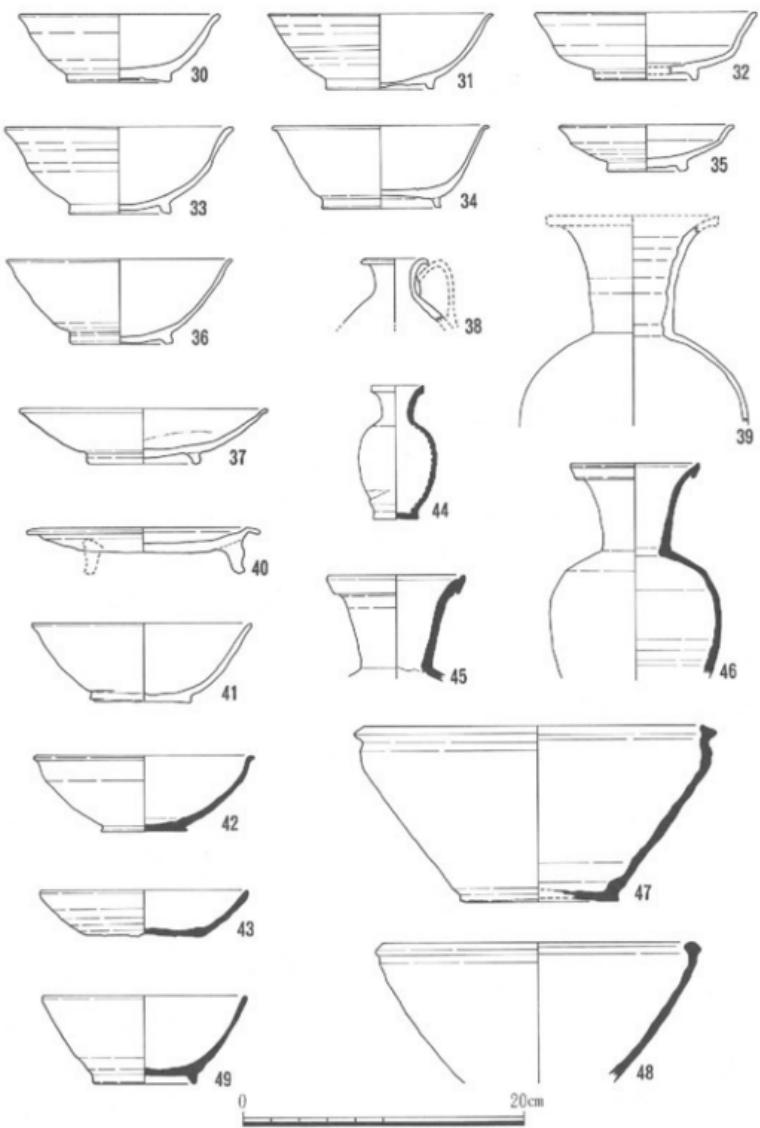
注

- 須恵器瓶子は西東南北の順に1~4の番号を付け、土師器皿は上位から順に1~8の番号を付けて取り上げた。遺物実測図との対応は瓶子1~4がそれぞれ(151~154)に、土師器皿1~8がそれぞれ(143~150)になる。
- 横田賢次郎・森田勉 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1974
- 田口昭二 「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』211号 1982
- 植崎彰一 「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡分布調査報告書』(Ⅲ) 愛知県教育委員会 1983
- (財) 京都市埋蔵文化財研究所 「平安京左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報』 1987
- 京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所 「一乗寺向町遺跡発掘調査概報」 1987
- 伊野近富 「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第37号 1990
- 菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』 1983
- 川越俊一 「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』 1983
- 橋本久和 「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』 高槻市教員委員会 1980
- 四條畷市教育委員会 「岡山南遺跡発掘調査概要・Ⅳ』 1987

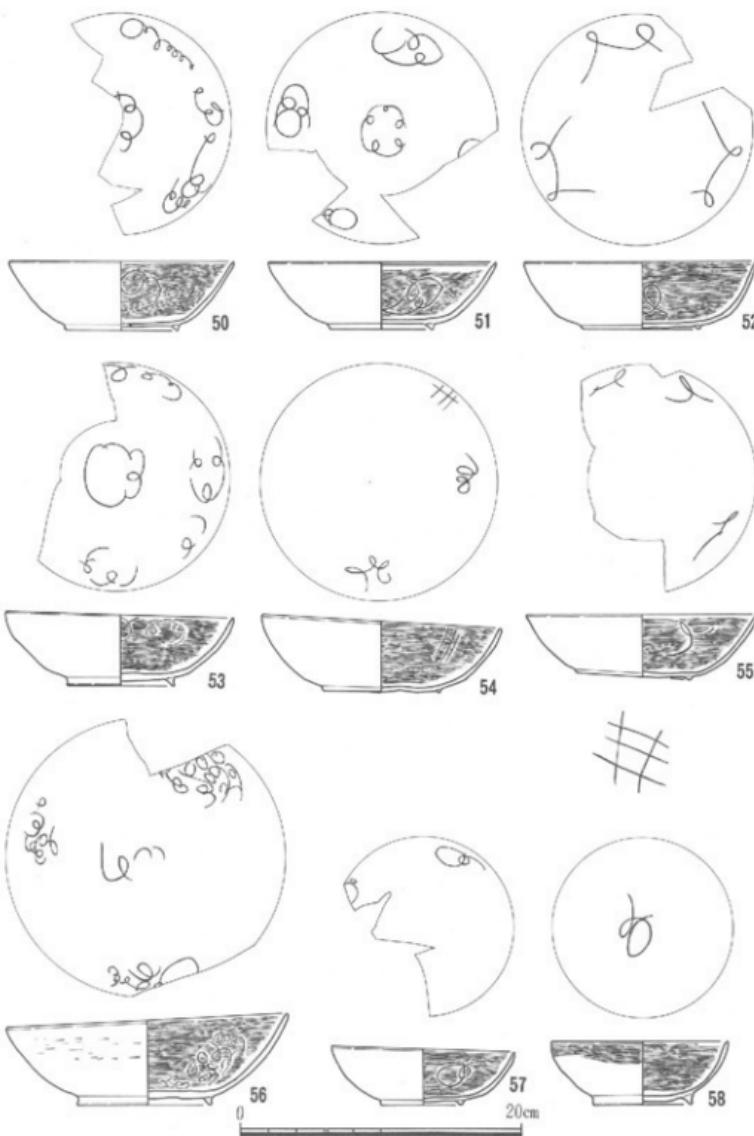
12. 亀田 博 「銅帶と石帶—出土銅・石銅の研究ノートー」『関西大学考古学研究室開設30周年記念 考古学論叢』 1983
13. 大阪市自然史博物館学芸員 石井久夫氏に鑑定していただいた。
14. (財)大阪文化財センター 『太井遺跡(その4ほか)・日置莊遺跡(その1-2)』 1990



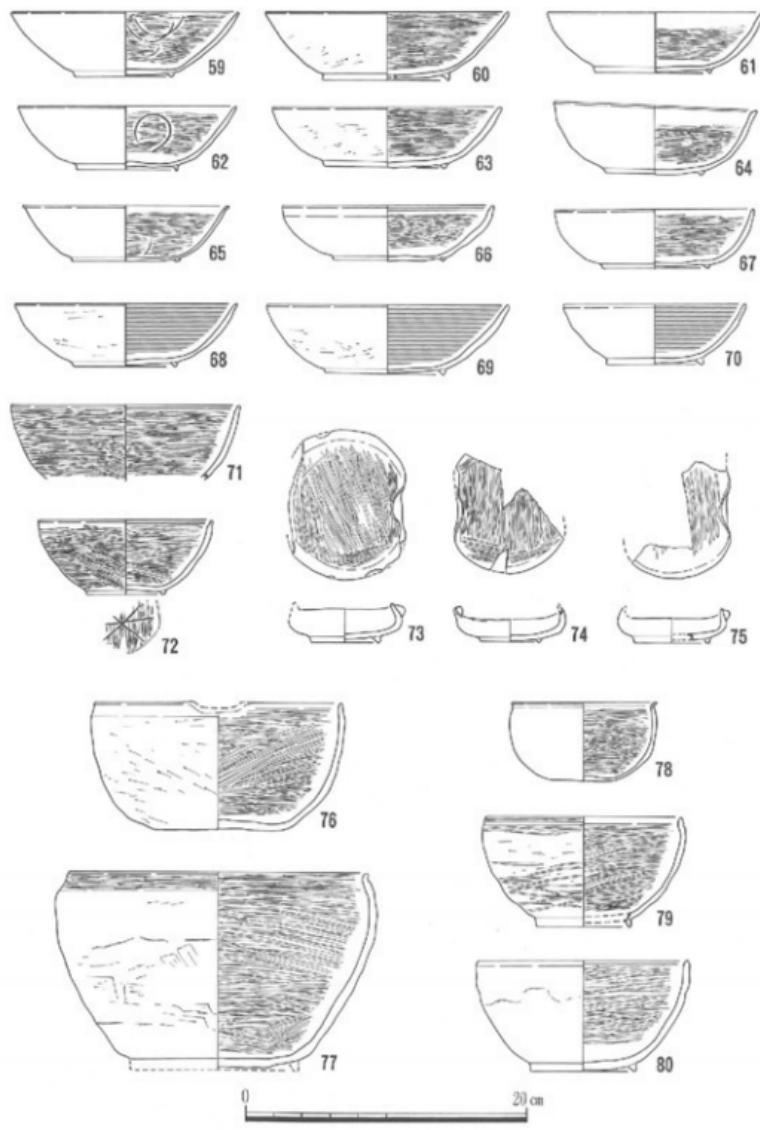
第13図 90-1・90-2区遺構及び包含層出土土器実測図 (S=1/4)



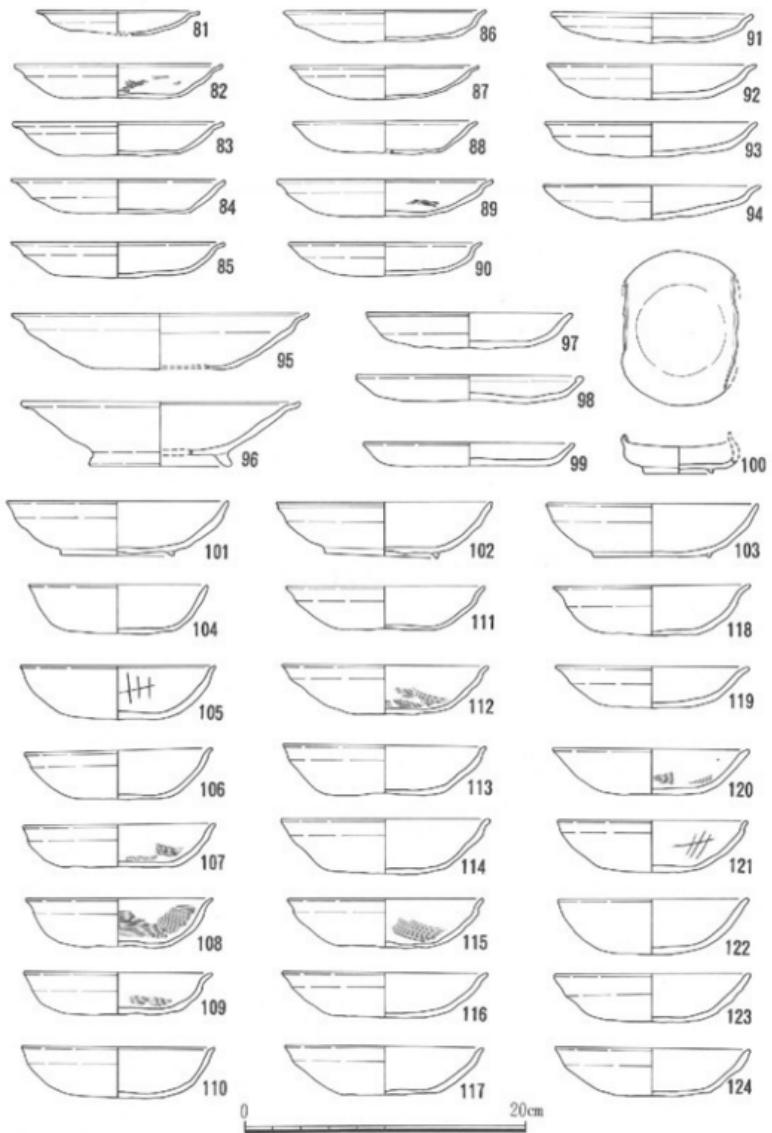
第14図 90-2区土器群出土土器(1) (S=1/4)



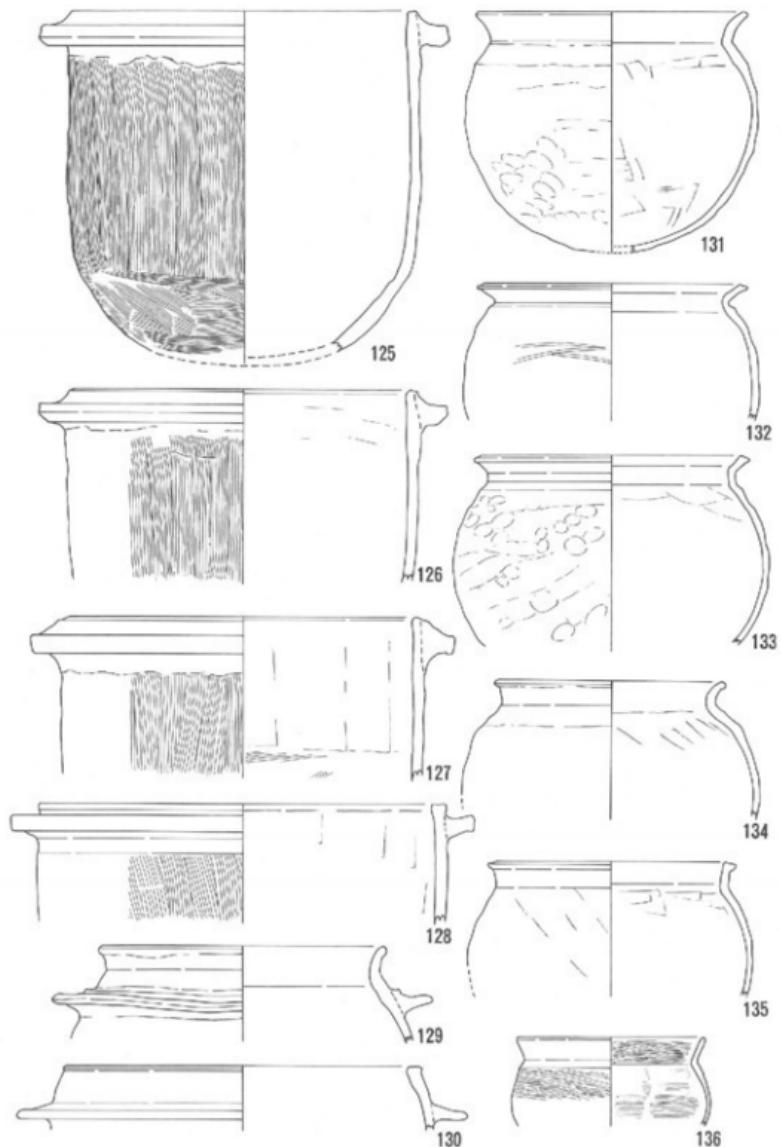
第15図 90-2区土器群出土土器実測図(2) (S=1/4)



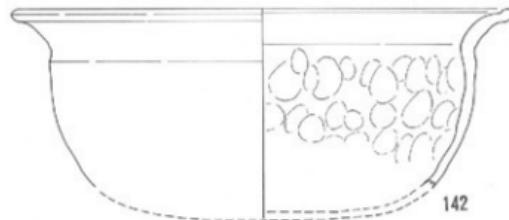
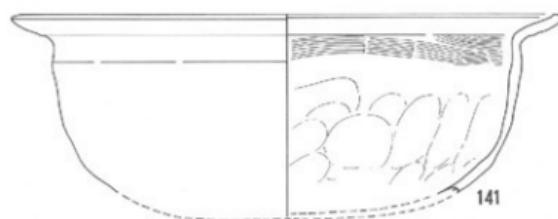
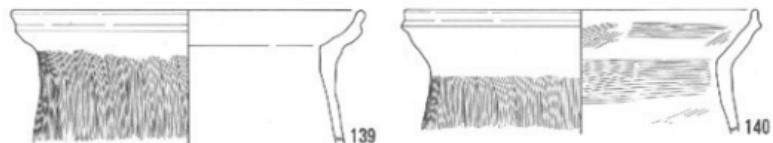
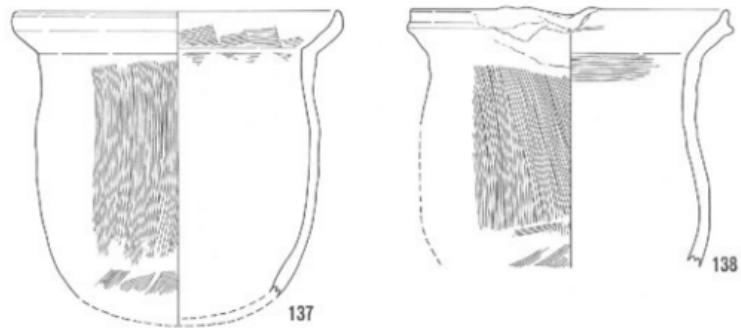
第16図 90-2区土器群出土土器実測図（3）（S=1/4）



第17図 90-2区土器群出土土器実測図(4) (S=1/4)

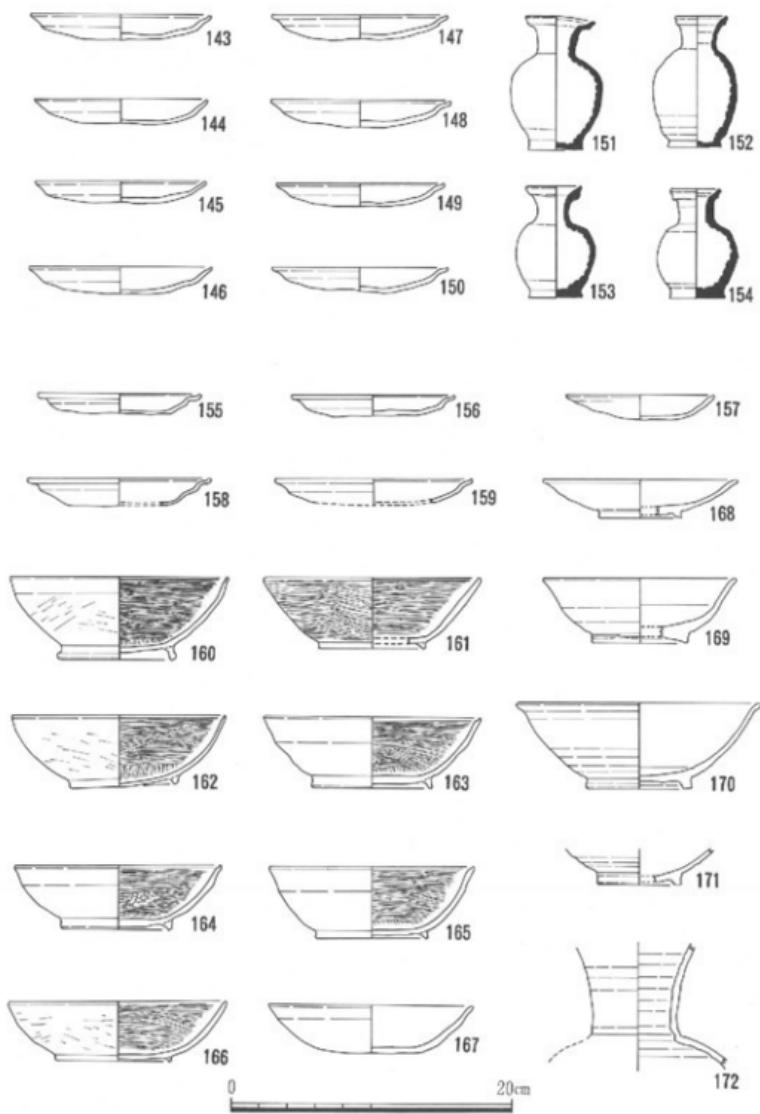


第18図 90-2区土器群出土土器実測図（5）（S=1/4）

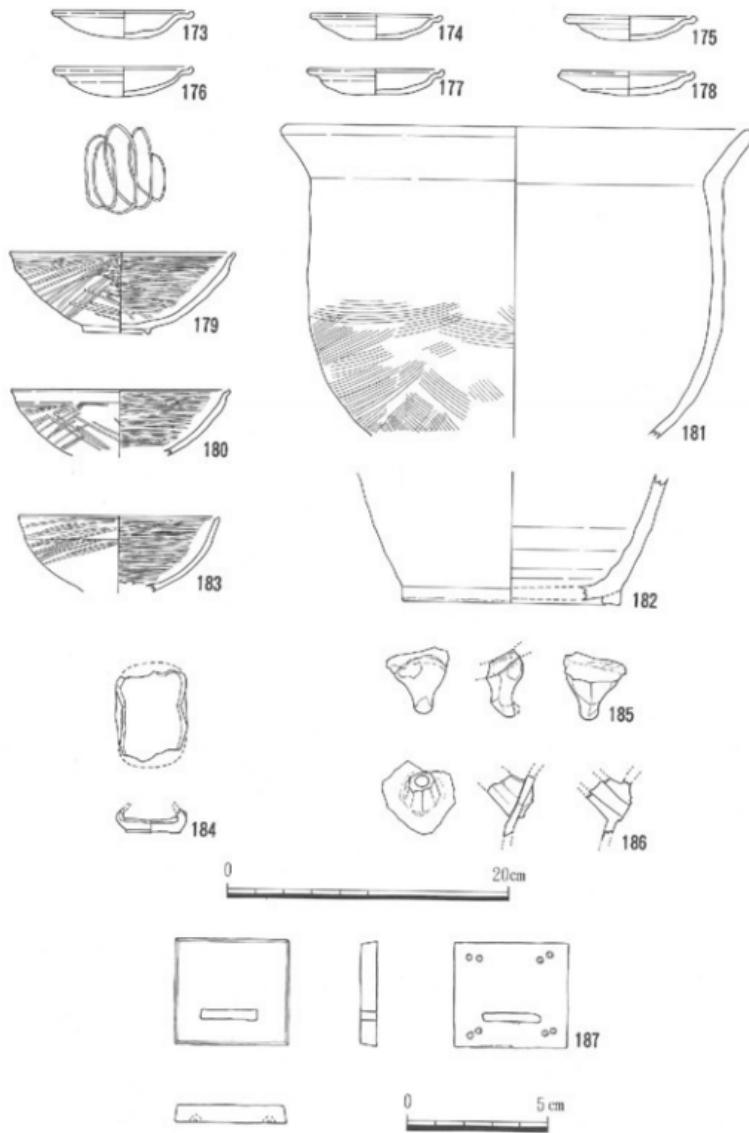


0 30cm

第19図 90-2区土器群出土土器実測図(6)(S=1/4)



第20図 90-2区祭祀遺構・井戸1出土土器実測図 (S=1/4)



第21図 90-3区出土土器 ($S=1/4$)・石製帶飾り実測図 ($S=1/2$)

第5章　まとめ

1. 平安時代の土器

今回の調査では、全章で紹介したように平安時代の土器に良好な資料を得ることができた。ここでは各資料の編年的位置付けについて若干の検討を加えたい。

90-2 区土器群は、今回の調査で最も出土量が多い遺構である。土師器・黒色土器のほか、緑釉陶器・灰釉陶器・京都篠窯須恵器が出土している。また、椀・杯・皿といった供膳器種のほか壺・鉢・甕・羽釜が含まれており、器種的にも豊富である。このうち、施釉陶器・篠窯須恵器についてはそれぞれの産地で、また土師器・黒色土器については各地域で編年作業が進められている。

まず、緑釉陶器については、京都洛北窯及び洛西窯・篠窯産、さらに近江系のものがある。伝世品と考えられる軟質の洛北窯産のものを除くと、主体となるのは硬質の京都洛西窯産のもので、輪高台を有し底部外面まで施釉されるものであることから百瀬正恒氏の編年^(注1)のB期（9世紀末～10世紀初頭）に属するものと考えられる。底部無釉の皿は時期的に下がる可能性がある。近江系のものについては、直線的のびる体部・接地面の段差の小さい高台より森隆氏の編年^(注2)のI a段階（10世紀初頭）に比定できよう。

灰釉陶器は、いずれも黒壺90号窯式及びその併行期に属するものである。その年代観については前川要氏の研究成果より9世紀後半と考える^(注3)。

篠窯須恵器は、玉縁状口縁の鉢（篠H期）を除くと、伊野近富氏の編年^(注4)のF～G期（石原畠2号窯～西長尾3号窯）で理解される。9世紀後半～10世紀初頭の年代が与えられる。

黒色土器杯は、A類の杯Bが主体である。器高指数26～30、外面の調整がナデあるいはヘラケズリで内面に暗文を施すものがある。橋本久和氏^(注5)のII a期、森隆氏^(注6)のIV期と考えられる。B類の椀については、底部外面までヘラミガキを施す古相のものである。B類椀の出現については10世紀中頃とされており、土器群出土品も混入品とすることもできるが、10世紀前半の資料とされる高槻市大蔵司遺跡土坑2^(注7)や奈良県平城京跡の資料^(注8)に認められることにより、ここではその扱いを保留しておきたい。

土師器の供膳具は、無高台の杯が多数を占める。外面調整はすべて口縁部ヨコナデ（e手法）あるいは全面ナデで、ヘラケズリ（c手法）は認められない。皿は、量的にも少ない。口縁部がヨコナデにより外反するものが主体を占めるが、典型的な「て」の字状口縁となるものはない。一部に前後する時期のものを含むものも、主体となるのは平安京跡における平尾政幸氏の編年^(注9)のII期中に比定される。

土器群は遺構の性格上、井戸や土坑と異なって土器の廃棄が行われた後も遺構が完全に土

中に密閉されず、土器廃棄行為完了後に上器が混入する可能性が高い。また、接合資料の検討から廃棄時の同時性は確かだと考えるが、高級品の伝世を除外しても大量の土師器や黒色土器には若干の時間幅は考慮する必要がある。

上記のそれぞれの土器から導かれる90-2区土器群の主体となる時期は、9世紀末～10世纪初頭が与えられる。同じ様相を示す資料には、平安京跡右京三条三坊S X07^(注10)・一乗寺向畠町遺跡S K 3^(注11)、灰釉陶器等に若干後出の様相が認められるものとして高槻市大藏司遺跡土坑2があげられる。

このほかの遺構出土土器については、器種的に限定されるため必ずしも良好な資料とは言い難いが、各資料の相対的位置付けと年代の推定を行いたい。

90-2区P-42出土土器は、黒色土器A類杯Bと土師器杯が出土している。完形の黒色土器杯は器高指數26で、他の1点も外面を明瞭にヘラケズリしており、土器群のものより古く位置付けられよう。土師器杯については器高3.4～3.8cmの深いもの（平尾分類^(注12)碗A）と器高3cmの浅いもの（杯A）に明確に区別される。土器群出土十師器杯では両者を明確に区別することは困難で、P-42出土土器が一段階古く位置付けられる。平安京跡出土資料とは若干様相が異なっており直接比較ができず、実年代を与えることは困難であるが、土器群に先行する資料として9世紀後半～末の実年代を与えておきたい。

祭祀遺構出土上器は土師器皿と須恵器瓶子に限定されるものも、一括りを示す良好な資料である。土師器皿は「て」の字状口縁皿の原形と呼べるもので、平尾編年のII期新～III期古に属すると考えられる。須恵器瓶子は全体にシャープさが無く、口縁端部に外傾する面をもつもので、伊野氏の篠日期で理解される。遺構の持つ特殊性もあるが、十師器皿の量的な増加として評価すると平安京跡右京二条二坊S X 1^(注13)に近い時期と考えられ、10世紀中頃の年代が与えられる。

井戸1出土土器は、定型化した「て」の字状口縁土師器皿が出土している。平安京跡左京一条三坊（鳥丸線立^(注14)）井戸1^(注14)・内膳町S X19^(注15)に類列が認められる。平尾編年のIII期中に比定される。黒色土器は、A類のみであるが、器高指數30以上の椀形態である。橋本編年のII b期新段階、森編年のVII期と考えられる。前章で述べたように包含層からの再堆積による混入品と考えられるものを除外すると、黒色土器B類椀の出土が無いものの、10世紀後葉の年代が与えられる。

以上の検討から、高槻遺跡における各資料の位置付けは、90-1区P-42・90-2区土器群→祭祀遺構→井戸1となると考えられる。これらの資料は9世紀後半～10世紀後半の間でほぼ連続するものと理解される。

北河内地域では9～10世紀の良好な資料は必ずしも多くはないが、ここでは高槻遺跡出土資料との簡単な比較を行って本地域における土器編年作業の叩き台としたい。まず、良好な資料が出土した遺跡として、四條畷市岡山南遺跡^(注16)があげられる。大振りで外面をヘラケ

ズリする黒色土器A類杯B、外面ヘラケズリ調整（c手法）を施す土器器皿が出土した第5次調査井戸は90-1区P-42に先行する時期に、黒色土器B類焼出期の資料とされる第8次調査井戸1は「て」の字状口縁土器器皿の口径が10~12cmで祭祀遺構と井戸1の間に位置付けられる。高柳遺跡の南に所在する寝屋川市神田東後遺跡^(註17)でも当該期の多量の土器が出土している。灰原と報告された土器集積は90-2区土器群と同時期、土坑102は下層が90-1区P-42、中・上層はP-42~90-2区土器群と同時期として理解されよう。

2. 平安時代建物群の評価

今回の調査では、多数の建物跡を検出することができた。建物跡は、東側を自然河川に面しており、この自然河川の西側の自然堤防上に立地しているものと考えられる。その中でもさらに周辺より若干高まった部分に遺構は集中している。この高まりをはずれると遺構はほとんど検出されず、平安時代の包含層（Ⅲ層）も薄くなり遺物の出土も激減する。

建物の時期については、柱穴からの出土土器によって9世紀後半～10世紀後半の年代を与えることができる。90-1区北側柱穴群では復原により5棟程度の建物の重複が認められ、1棟の最大存続時期を20年程度とすると最大100年となり出土土器の時期幅と矛盾しない。遺構・遺物から遺跡の特徴をあげると次のとおりである。

1. 90-2区建物1・2等の規模の大きな建物は2間×3間～2間×5間の規模で柱間は2m程度、柱の掘形は直径80cm・深さ1m程度であり、平安時代の建物としては比較的大型と考えられる。
 2. 90-2区で石製帶飾り（巡方）が出土している。
 3. 90-1区で中国刑系・定窯系のI類白磁碗が出土している。
 4. 90-2区土器群は大量の土器が出土しており、庶民の日常の所有・使用する土器量をはるかに越えたものである。こうした土器を大量に使用する場としては饗宴等を想定せざるを得ない。
 5. 出土土器中には綠釉・灰釉陶器が多く含まれている。出土量は大阪府下でも最大級であり、碗・杯・皿等の供膳器種に占める割合も一般集落跡よりもかなり高く平安京跡の数値に近いものと考えられる。綠釉陶器には獸足（香爐・壺等の脚部）・水注といった特殊な形態のものがあり、I類白磁碗を含めてこうした土器は平安京や官衙遺跡・寺院跡などの遺跡での出土例が知られており、一般集落からの出土例は極めて少ない。
 6. 文字関係の資料については、墨書き土器が4点出土している。判読可能なものには「○宅」と書かれているものが2点ある。
- 以上のことから建物に住んでいた人については、次のことが考えられる。
1. 高級な土器類を所有していた経済的に豊かな人である。

2. I類白磁碗・東海系縁釉陶器等は直接入手したと考えられず、都（平安京）の天皇家・有力貴族とのつながりが想定される。
3. 石製帶飾りを有することから官人層である。

以上のことから、建物の住民が有力地方豪族＝地方官人（郡司）と関連すると理解される。他方、復原された建物は大型のものがあるのも官衙の中心建物するには規模が小さく、その配置についても規画性を持つとは言い難い。また、調査地内からは瓦については平瓦が数点出土したにとどまり、瓦葺き建物は存在しないと考えられる。以上の検討をまとめると、今回調査地で見つかった建物群は地方豪族の居宅もしくは地方官衙（茨田郡衙）に間違い・付随する建物のいずれかとなろう。前者となる可能性が高いと思われるが、ここではその結論を出さず、今後の調査・研究に委ねたい。

3. まとめ

今回の調査では、多数の建物跡をはじめとする遺構と大量の土器をはじめとする豊富な出土遺物を得ることができた。建物の性格については前項で検討を加えたとおりであり、出土土器についても当該期の極めて良好な資料となることが判明した。今回は詳細な検討を加えなかったが、当遺跡の出土土器はかなり様々な地域の土器によって構成されており、土器の生産・流通を考える上でも重要な資料である。

高柳遺跡の北方には、第2章で述べたとおり高柳廃寺がある。この高柳廃寺については『聖徳太子伝私記』あるいは『聖徳太子伝脣』に記される茨田寺に比定する藤沢一夫氏の説がある⁽⁺¹⁸⁾。藤沢氏は遺跡の所在する高柳一帯を茨田郡茨田郷に比定し、郡衙の所在を推測している。今回の調査では少なくとも平安時代（9世紀後半）以降、高柳の地が茨田郡の中心として機能していたと推測可能な資料を得ることができた。藤沢氏の高柳＝茨田郷説を裏付ける有力な資料となろう。

今回の調査では奈良時代以前の遺構については検出できなかった。遺物については古墳時代後期のものが数点出土しており、付近に集落の存在が推定される。平安時代については、茨田郡の中心として機能していたと推測され、この時期の茨田郡衙も周辺に所在する可能性が高い。今後は、茨田郡衙・高柳廃寺を含めた高柳遺跡の解明が大きな課題となろう。

また、高柳遺跡の南東にはほぼ同時期の集落跡と考えられる神田東後遺跡があり、両遺跡は古川をはさんで対面していたと考えられる。神田東後遺跡も縁釉・灰釉陶器を含む多量の土器が出土しており、高柳遺跡と同遺跡の関係の解明も重要な課題である。

さらに、淀川左岸の低湿地の開発の時期・契機についても明らかにすべき課題である。高柳遺跡では、平安時代（9世紀後半）以降の建物群廃絶及び自然河川埋没後も11～12世紀の井戸・土坑・溝等の遺構が検出されており、中世以降も耕作地として利用されている。周辺

の状況が明らかになっていないが、高柳遺跡で平安時代の建物群が出現する9世紀後半がひとつつの画期となる可能性がある。文献史料にはこの地域に9世紀代に築堤工事が実施されたことを示す記述が見られ^(注19)、平安京の遷都とともになって淀川の治水等の整備が行われたことを想起させる。今後、さらに周辺での発掘調査例の報告を待つて検討を加えたい。

高柳遺跡は現地表面下1m程度の深さに埋まっており、過去に削平等による破壊は受けたおらず、遺跡の保存状況は極めて良好であることが判明した。今後、周辺の調査の進展により今回の調査で積み残した様々な問題を明らかになり遺跡の性格が解明されることを期待したい。

注

1. 百瀬正恒 「平安時代の墨釉陶器」 『中近世土器の基礎研究』 II 1986
2. 森 隆 「近江系墨釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」 『考古学雑誌』第76巻第4号 1991
3. 前川 要 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」 『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要』 III 1984
- 前川 要 「平安時代における東海系墨釉陶器の使用形態について」 『中・近世土器の基礎研究』 III 1987
- 前川 要 「平安時代における施釉陶磁器の様式論的研究」 『古代文化』第41巻第8・10号 1989
4. 伊野近富 「縦窓原型と陶邑窓原型の須恵器について」 『京都府埋蔵文化財情報』第37号 1990
5. 橋本久和 「畿内の黒色土器」(1) 『中近世土器の基礎研究』 II 1986
橋本久和 「まとめ」 『鷹上郡衙他関連遺跡発掘調査概要』13 高槻市教育委員会 1989
6. 森 隆 「西日本の黒色土器生産」 『考古学研究』第37巻第2・3号 1990
7. 高槻市教育委員会 『鷹上郡衙他関連遺跡発掘調査概要』 9 1985
8. 奈良市教育委員会 『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和61年度』 1987
9. 平尾政幸 「平安時代前期の土器」 『平安京右京三条三坊』 (財) 京都市埋蔵文化財研究所 1990
10. 前掲注9
11. 京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所 『一乗寺向畠町遺跡発掘調査概報』 1987
12. 前掲注9
13. 京都市文化観光局・(財) 京都市埋蔵文化財研究所 『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』 1982
14. 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』 II 1980
15. 京都府教育委員会 『平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要』 『埋蔵文化財発掘調査

概報1980-3』 1980

16. 四條畷市教育委員会 『岡山南遺跡発掘調査概要・IV』 1987

出土資料については四條畷市教育委員会野島稔氏のご厚意で実見することができた。

17. 寝屋川市教育委員会 『神田東後遺跡』 1989

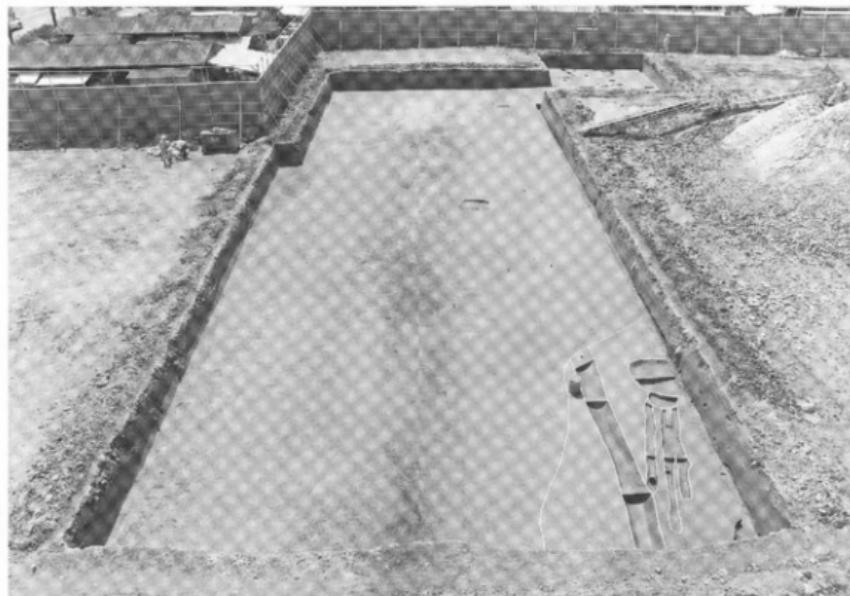
18. 藤沢一夫 『寝屋川市城の古代寺院』 『寝屋川市誌』 1966

19. 大同元（806）年『日本紀略』・嘉祥元（848）年『統日本後紀』・貞觀12（870）年『三代実錄』に築堤記事が見られる。

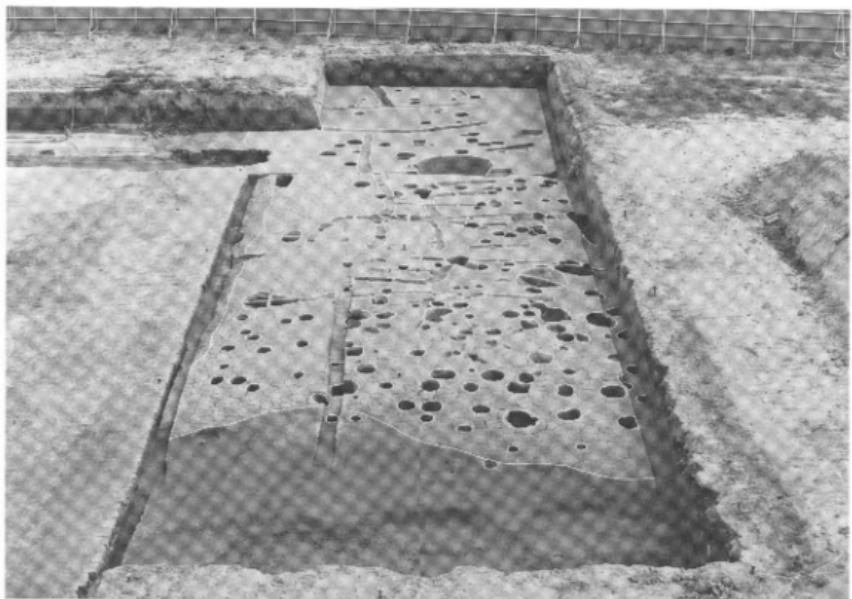
図 版



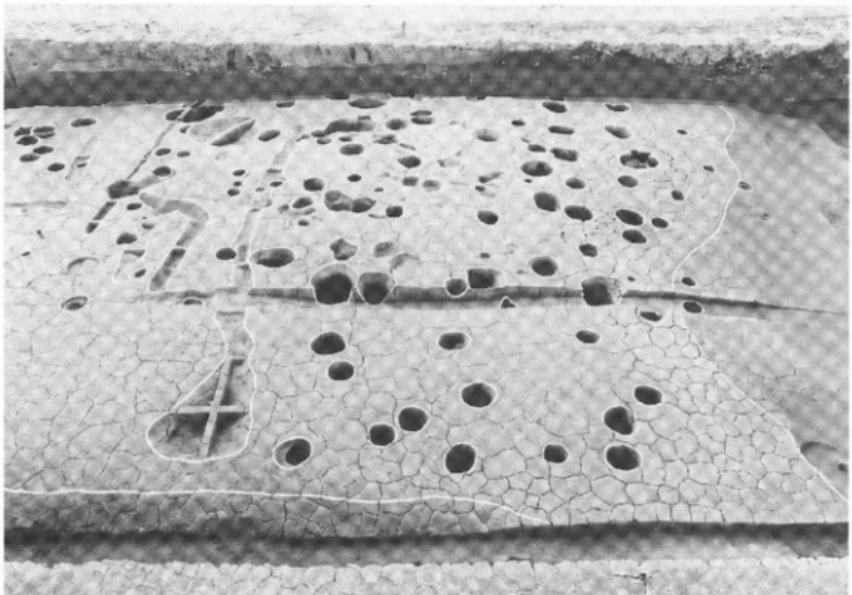
a. 89-1区・90-1区調査区全景(東から)



b. 89-1区調査区全景(北から)



a. 90-1区調査区全景(北から)



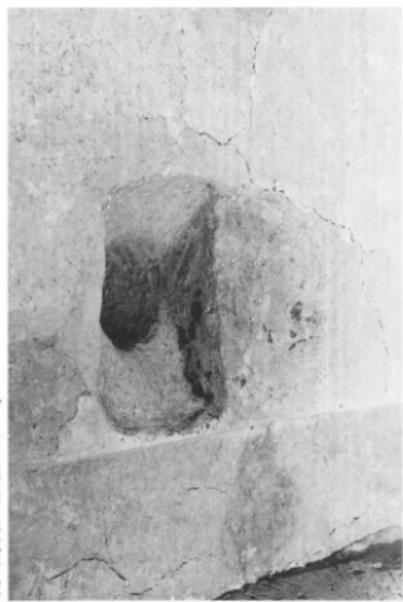
b. 90-1区北側柱穴群(東から)



a. 90-1区 P-27(南から)



b. 90-1区 P-42(南から)



d. 90-1区 P-48(南から)

d. 90-1区 土坑3(東から)



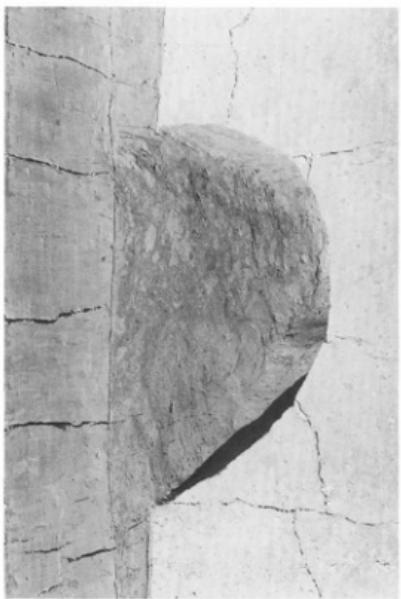
b. 90-1区 P-158(東から)



a. 90-1区 P-80(南から)

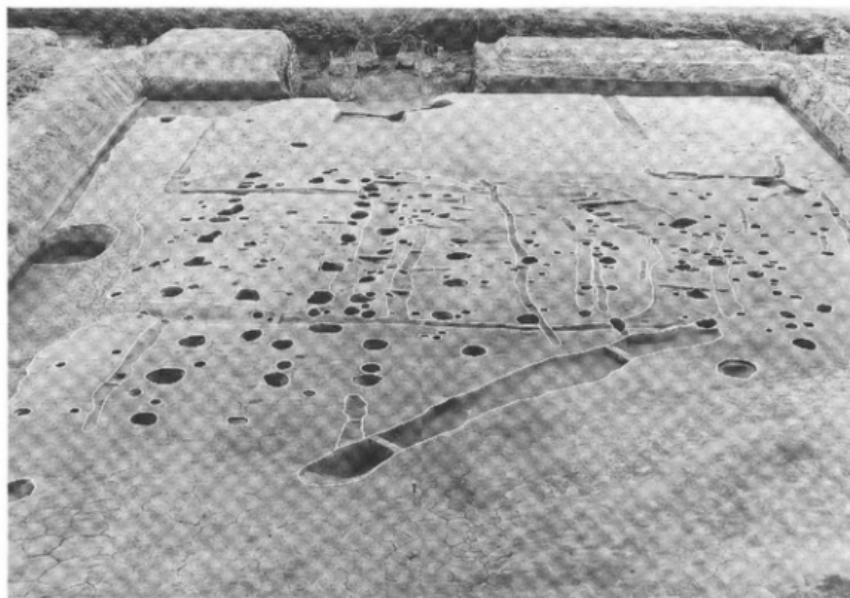


c. 90-1区 P-160(東から)

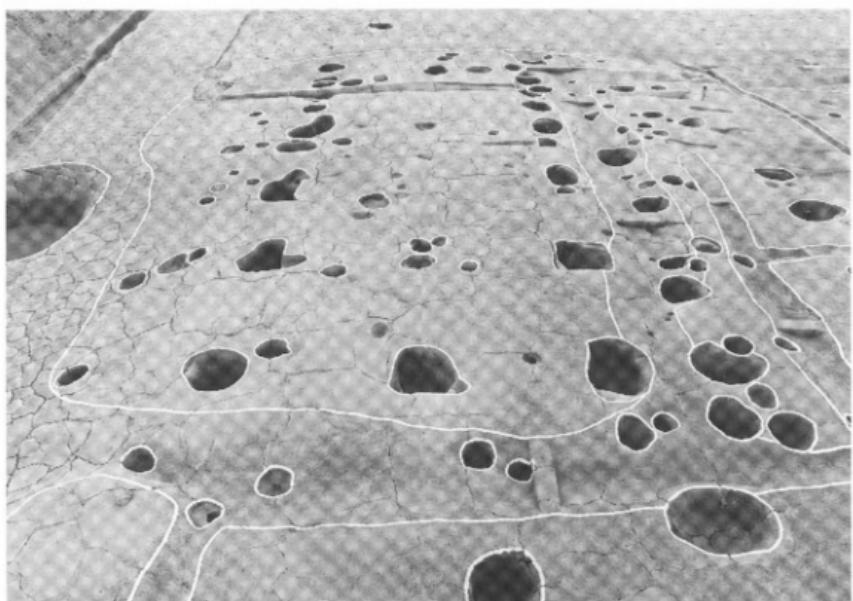




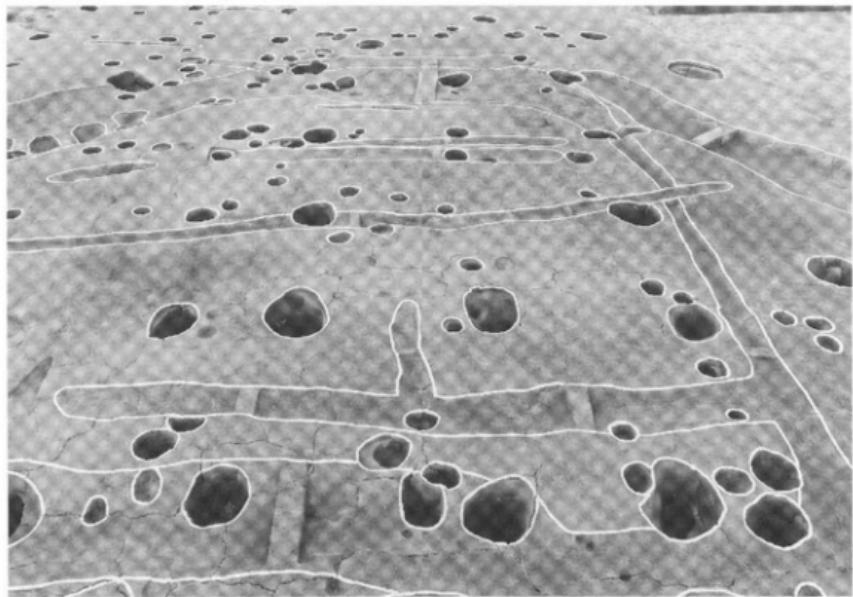
a. 90-2区調査区全景(北から)



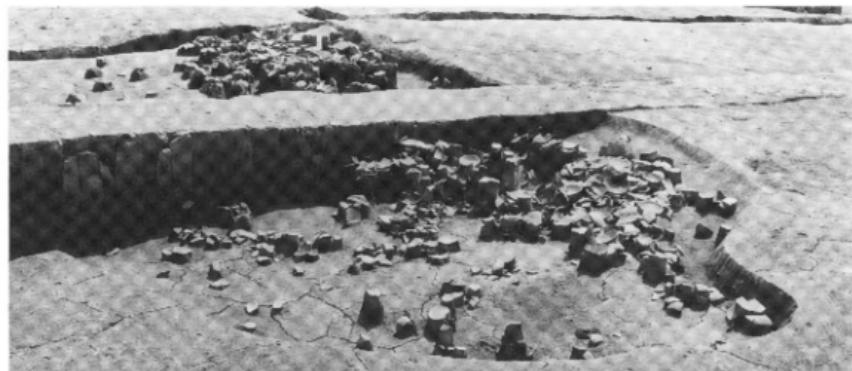
b. 90-2区柱穴群(北から)



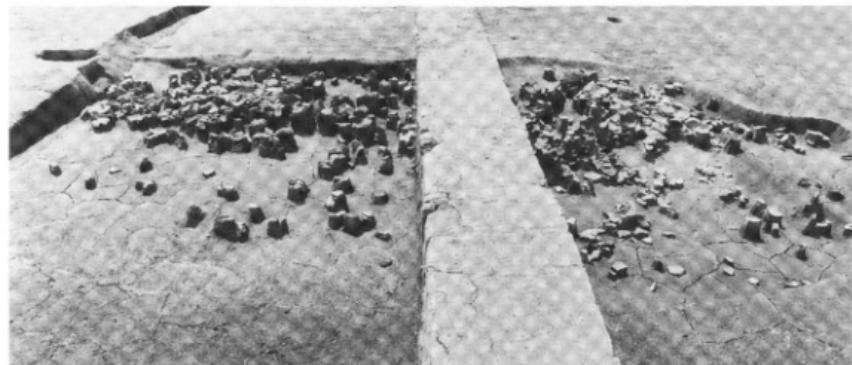
a. 90-2区建物1(北から)



b. 90-2区建物2(東から)



a. 90-2区土器群(北東から)



b. 同上(東から)



c. 同上(南東から)



b. 90-2区土器群北側(北西から)

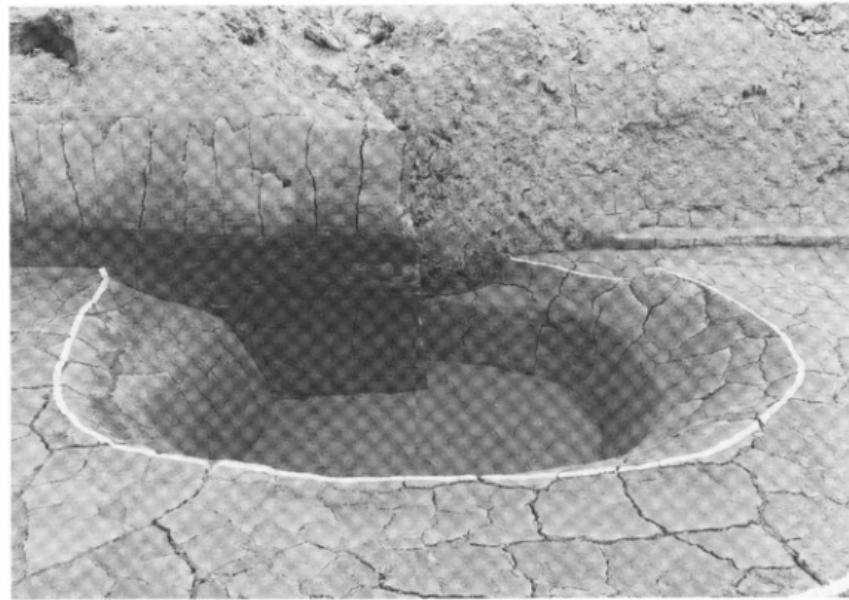


a. 90-2区土器群南側(南東から)

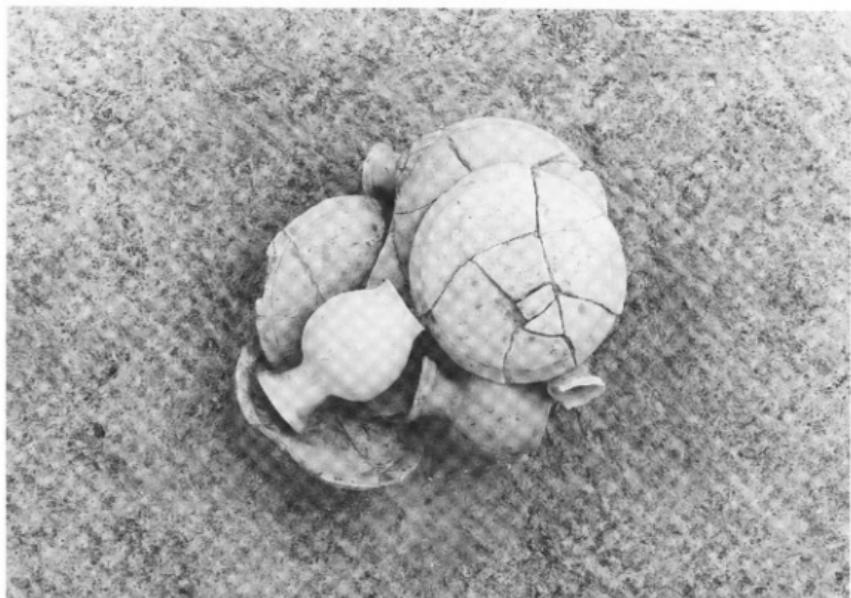




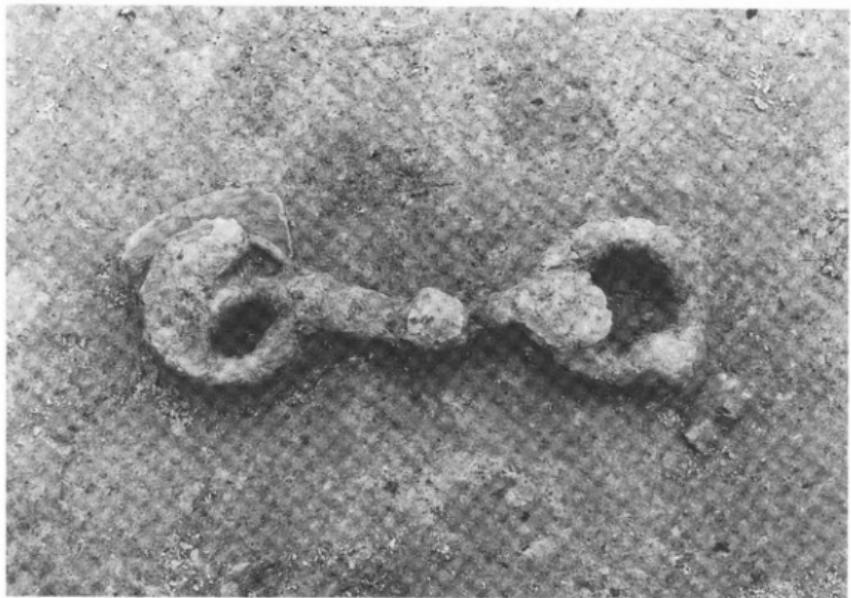
d. 90-2区井戸1(南から)



b. 同上(西から)



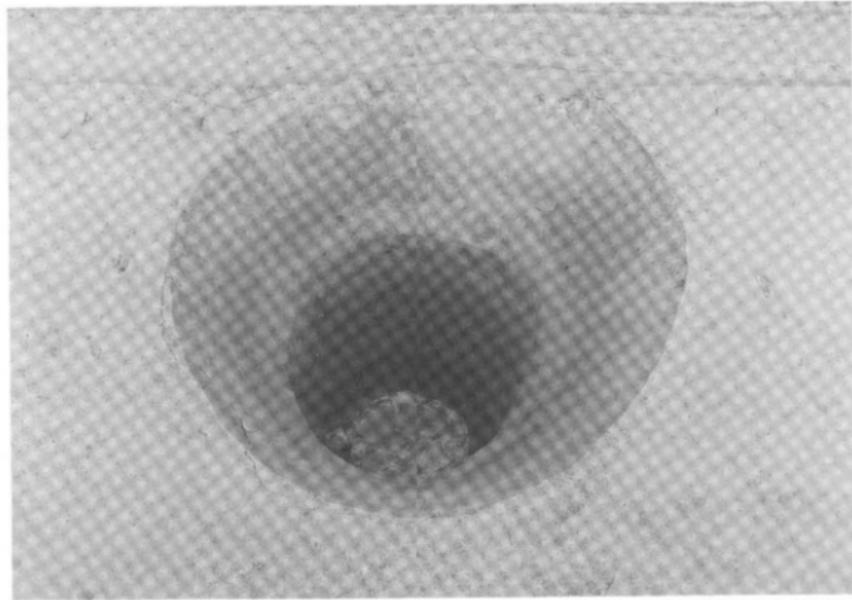
a. 90-2区祭祀遺構(南から)



b. 馬具(轡)出土状況(北から)



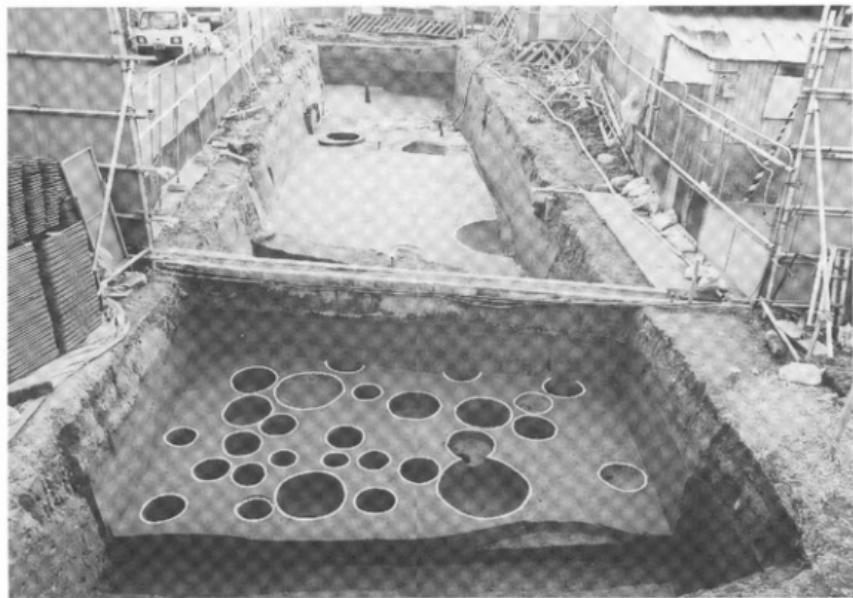
a. 90-3区調査区全景(南から)



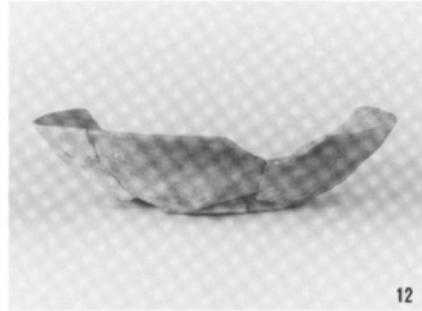
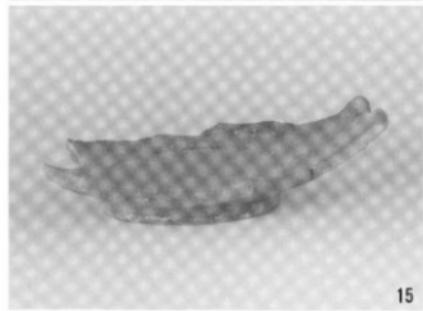
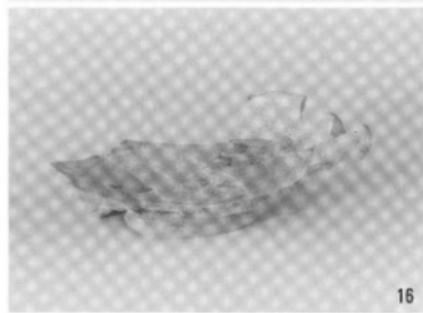
b. 90-3区井戸2(西から)



a. 90-4区全景(南から)



b. 同上 (北から)



黑色土器杯 土師器杯 灰釉陶器皿 綠釉陶器皿・小椀 白磁椀



30



38



31



39



32



40



34



41

緑釉陶器碗・皿 灰釉陶器手付小瓶・長頸瓶 白色無釉陶器三足盤・椀



44



46



27



28



42



188



47



189

須惠器瓶子・壺・榢・鉢 灰釉陶器長頸瓶 墨書土器



56



57



52



58



62



78



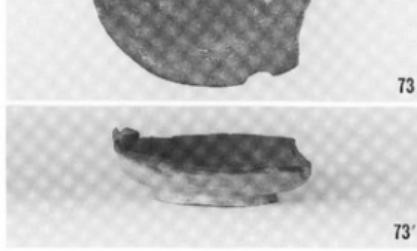
65



73

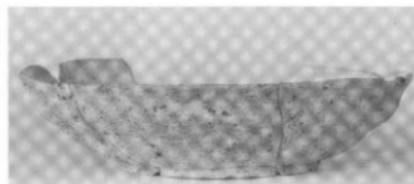


71



73'

黒色土器杯・碗・耳皿



101



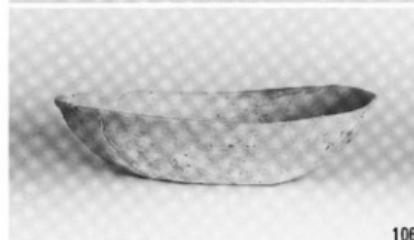
114



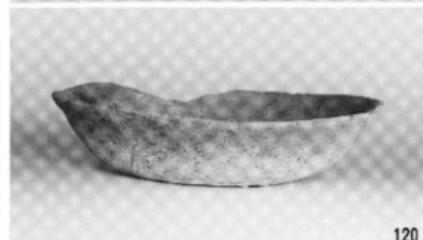
102



118



106



120



112



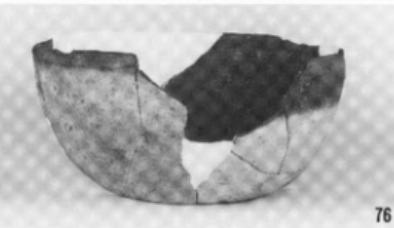
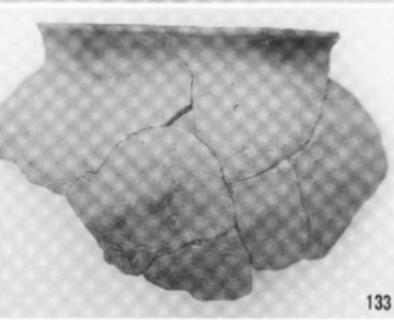
121



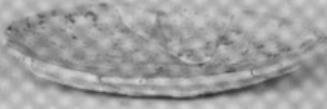
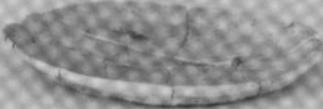
113



122



土師器皿・羽釜・甕 黒色土器鉢



須恵器瓶子 土師器皿



155



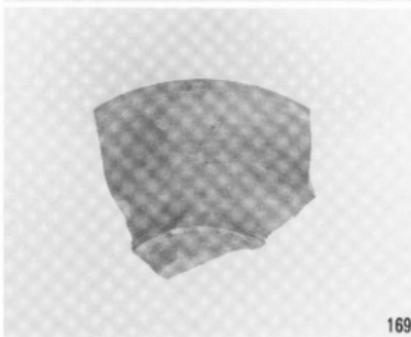
156



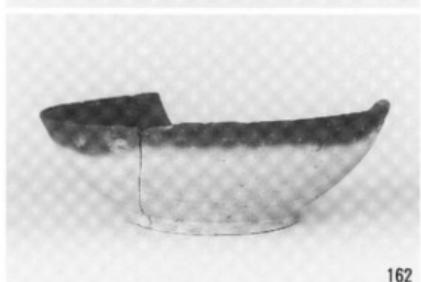
160



172



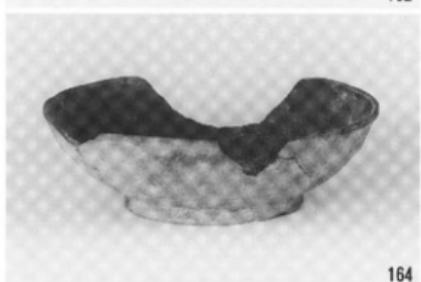
169



162



187



164



187'

土器皿 黒色土器椀 灰釉陶器長頸瓶 緑釉陶器椀 石製帯飾り(巡方)



179



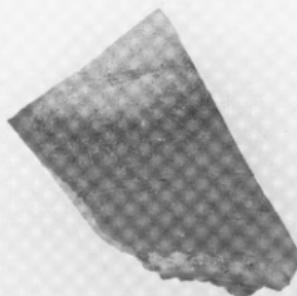
173



174



175



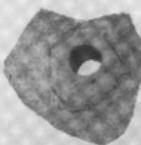
182



184



184'



186



185

瓦器 梗 土師器小皿 灰釉系陶器 灰釉陶器耳皿 綠釉陶器(脚部)・水注(口綠部)

高柳遺跡

府営高柳住宅建て替えに伴う

埋蔵文化財発掘調査概要報告書

平成3年3月

発行 寝屋川市教育委員会

大阪府寝屋川市本町1番1号

印刷 サツキ印刷株式会社

